
真実の果実

闇導リオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真実の果実

【Nコード】

N0572W

【作者名】

闇導リオン

【あらすじ】

1 - 6の生徒、西野菖蒲は幼馴染の川瀬優騎と友達
の山田徹、彼等はもうすぐで夏休みを迎えようとしているが
主人公、西野菖蒲と、川瀬優騎だけ夏期講習強制参加になっ
てしま
った

一人一人、誰にも言えない想いを秘めたまま、
一学期は過ぎた

真実の果実と嘘の果実、どちらを信じればいいのか

あるいは、どちらが‘真実’なのか
それは、神と結果だけが分かること
高校生時代を描いた若い物語

何時も通りの光景

「西野、課題終わった？」

「まっだー笑」

「笑ってる場合か、早くしないと担当えいりあんだぜ」

「うっげ、やば・・・ってそういう川瀬はどーなんだよっ」

「はっはー、ばれたか、俺も終わってなーい」

「人の事言えないじゃん笑」

「ははっ、だよな」

私達の会話は何時も通り、馬鹿っぽい

私が西野 菖蒲、んで隣が川瀬 優騎

二人は幼馴染で、高校も頭が似たり寄ったりで一緒、

「もうすぐ一学期終わるのかー」

「なに？今更、川瀬がそんな事言うなんて珍しい」

「いつやー夏休みだーって思ってたさ」

「そっちか、やっぱりね」

「なんだよ？」

「なんもないっ」

「はー？なんだそれ笑」

川瀬が吹き出したみたいに笑った

私もつられてへへっ、と笑った

「私等、夏休み大丈夫かな？」

「なんで？」

川瀬はきょとんこちらを向いた

「夏期講習」

「カーーーーーー!!!」

思い出したかのように髪の毛をぐしゃつとして叫んだ

「忘れてたんだ」

「ううっ……西野さんよー、そんな現実言わないで下さいよー泣」

川瀬は道路にしゃがみこんで頭を抱えている

「道のど真ん中で叫んで泣いて、あんたってほんっと近所迷惑っ」

「いーじゃーん、西野が悪いもーん」

「はあっ？なんで私のせい？」

「夏期講習とか言うからー」

「学校で伝えたらあんたが泣き叫んで山田にすがりつくでしょー」

「そ、そんなことしないもーん」

一瞬赤面になってぷいっと横を向いた

山田って言うのは、山田 徹って言う川瀬の友達

帰る方向が違うから行くときは何時も学校の門で集合で

帰るときも門で解散

「山田は頭いいよねー、誰かさんと違ってー」

「お、俺は偶然知らない問題が出て赤点をとっただけだぞ」

「うっそだー、歴史ん時寝てただろー」

「徹になりたいよ……泣」

「山田が可哀想だよ」

「えっ、何それ、ひどくない?!」

「川瀬に味方はいないのだ」

「うっわーん」

「ほらほら、帰るよ」

次の日

キンコンカーンコン

「山田ー、西野ー、おっはよー」

「おう、川瀬おはよう」

「おはよ、ってかおそようだな、ぎつりぎりな時間に来るなよ」

「な・・・っ、お前等が置いてったんだろ?!」

「川瀬、起きるの遅いよ」

山田が川瀬の肩にぽんつと手をおいて言った

「どんまい」

「うつわーん」

「おいおい、その三人、青春はいいがはやく席に座れー」

「おっ、ごり先生おっはよー」

「山田、西野、おはよう・・・んで川瀬、おそよう」

「せ、先生までっ・・・くっそーー!」

ごり先生は私達の副担任で吉田先生だけど

皆はごりらって呼んでる

今、担任は結婚かなんかでいないらしい

「ごーり先生ー、夏期講習はどーなんすかー」

クラスの一人が叫んだ

「うつげ、夏期講習ー、ああー山田ああー」

「おいおい」

ごり先生は一枚の紙を教卓の引き出しの中から取り出した

「えーっと・・・すぐく面倒くさい夏期講習の参加者は・・・」

「俺じゃありませんように俺じゃありませんように・・・」

「川瀬、そんな願ったって結果は一緒だ」

「西野ー、吉本ー、鈴木ー、……」

と、ほとんどの人の名前を言っていた

「はっはーん、西野も入ってやんのー笑」

「言ってる場合か……」

山田が心配そうに川瀬の方を見た

「村田ー……以上だ」

「えっ、」

「えー……！！！」

クラス全員が叫んだ

「か、川瀬が……赤点とらなかった……」

「まじ？嘘だろー」

すると川瀬が鼻を高くして机の上に立った

「おいおい皆の衆、俺だってこのくらい……」

鼻で笑いながら言った

だが、ごり先生はため息をついた

「……と、言いたいところなんだが

川瀬、お前も入ってるぞ」

「え」

「机からおりて座りなさい」

「はい……」

「ぷっ……あはははははは」

クラス全員が笑い出した

「わ、笑うなー！ごりめーくっそー」

「こんな仕打ち、他にはないと思ってな笑」

ごり先生も笑っていた

「皆で俺を馬鹿にしゃがってー！！！」

「だから言っただじゃん、川瀬に味方はいないんだってー笑」

「はっはっはー、ごり、最高ー！」

「……相変わらず騒がしいな、川瀬のクラスは」

誰かの声が聞こえた

すごく大人のような声に低音、

皆はその人の方へ目を向けた

「えいりあん先生だー」

「1 - 6 が宇宙人の手にー……」

「次、理科ですよ」

「うっげー」

えいりあん先生は理科の先生、

「川瀬、お前、課題終わったかー？」

「い、今家に……」

「はーっ、」

えいりあん先生は大きいため息をついた

「川瀬、お前だけ授業中、課題な」

「えー……！そんなのずるいですよー」

「駄目だ、やってこなかったお前が悪い」

「そんなー……西野はどーなんだよっ」

「昨日ちゃんとやりましたーっ」

「くっそー」

「川瀬は完全なるMだな」

えいりあん先生は笑いながら言った

「確かにー」

これが毎日の私達、

皆毎日1 - 6 が楽しくて風邪でも来る奴もいるという噂もあるくらいだ

そして、それぞれ誰にも言えない想いを抱えながら
一学期は過ぎたのであった

真実の一口

「熱い」

「熱いな」

「熱いねえ」

と、三人はそればかりを言っていた

「つてか、徹、お前は夏期講習来なくてもいいんだぞ？」

「僕は、二人が心配だし、勉強も学校じゃないと捗らないからね」

「へー、山田つてすごいねー」

「ほんと、見習いたいよー」

「ははっ、二人が心配な方が大きいけど……」

「なんか言った？」

「うっん、なんでもない」

キンコーンカーンコーン

「全員席につけー……って山田、お前はいいんだぞ？」

「僕も勉強したいですから」

「ほー、偉い志だな、川瀬ー、お前も見習えよー」

「ええっ、なんで俺だけ?!」

「あははは」

「ぐり最高ー」

夏期講習は夏休みにやっていることだけど
何時もの学校生活とは変わらないなと思う

「頭痛い・・・」

「ちよつと勉強しただけじゃん」

「川瀬はか弱いからな」

「徹・・・ちよつとは心配してくれても・・・」

「無理」

「ううつ・・・」

「ほらっ！明日も頑張るよ！」

「ふぁーい」

「何、その気の抜けた返事は！びしつとしなさい、びしつと！」

「西野、お母さんみたい・・・」

「えっ、そうかな？」

「あっ、僕、あっちだからじゃあね」

「うん」

「ばいばーい」

次の日

何時もの様に夏期講習がおわって川瀬の顔はげんりしていた

山田も何時もと変わらないすがすがしい顔で歩いていた

と、誰かの声が聞こえてきた

「……るくん？……徹くん？」

「誰？」

「……山田ー誰ー、あの仔ー」

知らない女の子が門の近くまで歩いてくる

山田の顔を見てみると青ざめたような顔になっていた

「……山田？」

「徹くん……だよね？久しぶりだね」

彼女はにこつと微笑んだ

正直、すごく可愛かった

同年代ぐらいだから……知り合いかな？

「……んでっ」

「？」

「なんでっ来たんだよっ」

何時もの山田の顔がちよつと怖くなった

その女の子も震えているようだ

「と、徹くん……会いたくて……駄目……だったよね・

・」

すごく泣きそうな顔をしている

「駄目に決まってるだろ！俺がどんな想いでこっちに来たかお前に
だって分かるだろっ」

「ごめ……な……さい……私……そんなつもりじゃ・
・」

女の子はもう涙を流す寸前だった

「帰ってくれ、俺にはもうお前という資格なんかない」

「だよねっ……急にこっちに来てごめんねっ……叔母さんの
家行く途中だったんだ

ほんとにごめんね・・・」

女の子は慌てて涙を拭い、とっさに走ってどこかへ行ってしまった

「・・・山田?・・・らしくないね・・・あの仔誰なの?」

「お前等には関係ない」

「関係ないって・・・どうかしたの?」

「おい、徹、何があつた?」

「関係ないって言ってるだろ!!!」

そのまま山田も家の方向へ走って帰った

「なんだよ・・・」

「分かんない・・・」

守りたいもの

次の日は山田はずっと俯いていた

「山田・・・、山田？おーい」

「抜け殻みたい・・・」

「本体は何処へいったんだ笑」

「昨日の・・・」

やつと山田が喋りだした

「お・・・うん？」

「昨日の見ただろ・・・」

「う、うん・・・あれ、誰なの？」

「俺等に教えないなんてーなにがあつたんだよー」

「忘れてくれ・・・お前等には関係ないから・・・」

川瀬はかつつとなった

「・・・んだよそれ」

「そっか、山田、課題、見せてくれない？私、まだおわってないからさー」

「う・・・うん・・・いいよ、僕も最後の部分だけやってないから一緒にやろうよ」

「川瀬？何してるのあんたもどーせやってないんでしょ？」

かつつとなっていたのがほぐれて何時もの川瀬に戻った

「ばれた？」

「ばればれでしょーっ」

「ははっ」

・ そう、これでいい、これで……よかった、はずなのにな……

「えいりあん先生はー？」

「あれー今日来てないじゃーん」

「急用がはいったらしい、かわりにごりがやるぞー」

「いやー……、ごりがきたぞー」

「お前等なあ……」

えいりあん先生が来てないなんて……珍しいな

「はー……おわったおわった」

「あっ……」

「西野どうした？」

「私、課題渡すの忘れてた、職員室行ってくる」

「そっか」

「玄関で待ってるぞー」

「うんっ走っていく！」

「廊下は走っちゃいつけませーん」

「あははは」

職員室はこっちだったよね

誰かの声が聞こえた

「・・・はい、分かってます・・・はい・・・」

「ピッ」

携帯の音？誰か話してるのかな

「ガタッ」

「誰だ？」

「西野です・・・失礼します」

そこにはえいりあん先生が立っていた

「あ・・・今の、聞いてたか？」

「はい・・・ちよつとだけ・・・」

「実はさ、田舎に帰らなきゃいけなくなっただよ」

「教師の仕事はどうするんですか？」

「辞めるよ」

「えいりあん先生、なんで田舎に帰っちゃうんですか」

「そこは、お前には関係ない」

「関係ない」

「どうして？」

「それ以上聞くな」

「・・・山田も関係ないとかで何も教えてくれないんですよ」

「そうか」

「だから、どうしてなのかなって・・・」

「関係ないとかさ、ほんとに関係あつたりするんだけどさ

なんか、自分を知られるのって怖い時もあるじゃないのか？」

「そうゆうものですか」

「そうゆうものなんだよ、所詮、俺も、お前の友達も臆病って事さ」

えいりあん先生はにやっと笑った

だけどちよつと寂しそうだ

「でも、友達だから・・・」

「そう、友達だからこそなんだよ」

「？」

「そのうち分かるさ、青春はいいな、だけど、今のうちに言って置く
お前は女だ、川瀬も、山田も男だ、何時かそういう『事情』って
もんがでてきて

三人は今のままの関係でいられなくなる

そうゆうの怖いんだろ、山田は」

「????」

「ははっ、分からないか・・・うーんじゃあ、お餅で説明してやる
ろっ」

と、えいりあん先生はよっこらせと職員室の机にあったお餅をもってきた

「一つは蓬餅、もう一つは普通のお餅2つ、
同じ餅同士で仲が良かったんだって」

えいりあん先生は蓬餅と普通の餅は混ぜた

「ちょっと変な色だけど3つの餅たちにとっては居心地が良かった
でも蓬餅と普通のお餅は違う

周りの奴等は気持ち悪いと思って引き離そうとする

でも、一度混ぜてしまったものはちぎりながらしか離れない
だからぶちっ、ぶちっとして3つははがされていった

ちぎられたものは簡単にくっつくが少しでこぼこして
その後がずつと残ってしまうそれが怖かった普通の餅の1つは
混ざり合うように『周りのものの手』を拒んだ

そうして、関係を壊さないように大事に大事に周りから見れば気
持ち悪い色の餅達を

守ったんだって」

「……蓬餅が私で、普通の餅が山田と川瀬って事ですか」
「あつたりー」

「山田は、関係を壊したくなかった……から……」
「そうそう、でも、将来、道は違ってくる、何時かは離れなくちゃいけないんだ」

山田はその事を理解していた、でもこの関係を壊したくないって
いう欲望が強かったのかな」

「そつか……山田はそんなこと……」

「だから、山田にがっつんと言ってやれ、今思ってることとかいらつ
いてることとか、

全部全部吐き出しちまえ、青春は一回だけなんだ
後悔しないように思いっきりやってこい！な？」

「でも、したら仲が悪くなつて……」

「じゃ、そこまでなんじゃないのか？」

「え……」

「お前等の絆はそんな事でちぎられるもんじゃないだろ」

えいりあん先生はまた、にかつと笑った

今度はとてもすっきりしたようだ

「行ってきます！」

「おう」

壊れないもの

タタタタタタ

走ってしまった・・・後で川瀬に怒られるな笑

「あ、西野っ、おっそいぞー」

「廊下、走ってただろ」

「ごめーん」

「廊下は走っちゃいつけませーんって言ったじゃーん」

「あははっ、・・・山田、話あるんだ、ちょっといい？」

山田は不思議そうにうなずいた

「川瀬は・・・・野宿！」

「ええっ・・・・」

「すぐ終わるからそこで待ってて」

「はいはい」

「何？話って」

「告白だと思ったでしょ？」

「思っていないよ笑」

「ま、いいけど、これから言うことは私の告白みたいなもんかな」
「ん」

山田はつばをぐくつと飲んだ

「山田！、何時までもうじうじするな！！！！」

「え？え、え？」

戸惑っているようだった

「言いたいことあんだったら言えればいい！言えない事あんだったら隠すな！」

ちゃんと私等に言え！」

「でも、関係ないことだし・・・」

「そうやってうじうじしてっから駄目なんだ！何が関係ないだ、何が忘れてくれた！」

そんな隠し事して私等が喜ぶと思ってんの？！しっかりしろ！」

「それは、西野と川瀬の為になると思っで・・・」

「私等の為なら隠してること全部吐け！！変わるのが怖いんだろ
とんだ臆病者だなっ、変わらない関係なんてないんだよ！

どうせ人間、死ぬんだ！思いっきりやれよっ、そんで、そんで・

・
その関係が壊れたらなおせばいい！！そんな簡単な事思いつかないなんて

あんたほんつと馬鹿！！！！

そうやって自分の思ってる事かくして誰が喜ぶんだっ

嬉しいなら嬉しいって言え！悲しいなら悲しいって言え！

隠し事するな！私等に思っでることぶつけろっ

そんなんで壊れる仲じゃないことぐらい

ずっと見守ってきたあんたが一番分かるだろ！

川瀬とずっと一緒にいた私が保証するっ

だから自信もてよ

なんの為に目があるんだ！！！！

守りたいならちゃんとしっかり目えあけて私等の事見ろ！！！！」

いつのまにか私の声はどんどん大きくなって泣いていた

「はぁ・・・はぁ・・・」

「ぷっ・・・」

「な、なんだよ」

「いや、いつも通りだなんて」

「んだよ・・・心配して損した」

「あははっ、言うよちゃんと、川瀬にも、西野にも、だから

西野も僕等が守ってることに自信もってちゃんと甘えていいんだぞ」

「・・・そんなこと、分かってる・・・」

「ははっ、」

「ああーもう！なんだよ、どっかの穴に落ちたい気分だあー」

「なんだそれ・・・あっ、川瀬・・・」

「・・・あー忘れてた」

「あははっ、行くか、今頃腹減ったーって泣いてるぞだねっ」

その頃

ぐ~~~~

「あー腹減ったー泣」

嘘か真実か

「僕……記憶がないんだ……」

「え……」

「親の顔も知らなくて、そんな時に叔母さんに預けてもらって
その叔母さんの孫だったのが前に会った子
麻衣って子

初めて会ったばかりなのに
久しぶりだねって言われて
一瞬戸惑って

初めてじゃなかったのかもしれないと思って
記憶はないから分らなくて
ごめん、分からないって言ったんだ
そしたら彼女だよって震えて言ってた
全然……っわかんなかった……っ」

川瀬はうつむいて泣いている山田の頭を手でぽんつとのせた

「……?」

「うん。なんか、おつかれさん」

「……川瀬と西野に……迷惑かけたな……すまない……」

」・

「誤らなくいい、だって俺等、そんなんで壊れる仲じゃないだろ」

「……ぷっ……その言葉……西野も言ってた」

「ええっ……まじかよ、いいとこどりしやがってこのやろ」

「西野、川瀬と似てるな」

「えー、こんな奴とー？」

「こんな奴ってなんだよっ」

「ははっ」

真実の果実は2人に知れてしまった
はてさて、それは真実の果実だったのか
はてさて、それは嘘の果実だったのか
どちらにせよ

果実の重さが三分の二軽くなった
でも食べるのは
三分の二減った

真実の果実は甘い、甘い、

では

嘘の果実は

？

本当の気持ち

「おい西野、何やってんだあ」

「んー？靴紐が結べなくてさー・・・」

すると川瀬が私の方へ来て、靴紐を結んでくれた

「相変わらず西野は不器用だなー」

「相変わらず川瀬は器用だなー」

「お褒めに預かり光荣です」

「別に褒めて無いんだけど」

「はいはい、いいから学校行くよ？」

山田が二人の真ん中に割り込みしてきた

「あつてんめ、今俺の靴踏んだだろっ」

「あ、ごつめーん、ついつい・・・ゴミかと思っちゃってー」

「わざとだろっぜってーわざとだろっ」

「血の氣が多い」

「いつくよー二人ともっ」

「はい」

「うん」

学校の玄関近くに来たとき

西方面の道から見たことあるような人を見かけた

「……………あつ、この前の……………えっと……………」

「麻衣」

……………ん？

「あー麻衣ちゃんか、こんにちわっ、俺ね、川瀬優騎って言うんだあ、」

「ナンパすんじゃない」

「ぶーぶー」

「なんでまた来たんだ」

「あ……あのつ……やっぱり私まだ信じきれなくて……」
・
「その……っ」

「僕は言った。麻衣の事は覚えていない」

「だ……よね……」

すると麻衣ちゃんは逃げていった

「おい、徹、そんな言い方しなくても……」

「あれでいいんだ……好まれるなら、いつそ嫌われた方が、よかったんだ」

「……?」

やっぱり、分からない、まだ何か隠し事があるのかと思うとむかついてきた

「……でも、一番気になったのは……」

授業がおわった

「はーおわったおわった」

「二人とも先に帰ってて、私、今日の分の奴、まだ移し終わってないから」

「はーい」

「気をつけるんだよ」

「ばいばーい」

「・・・さて、おわったし、帰るか」

私は玄関へと向かった

そして玄関をでようとしたその時・・・

「・・・・・・・・麻衣・・・・・・・・ちゃん・・・・・・・・?」

「あ．．．つ、えと．．．徹くんの．．．」

「徹くん．．．か、」

「．．．？」

「あ、私、西野菖蒲」

「私は川崎麻衣と申します。このたびは徹くんがお世話になります」

麻衣ちゃんはぺこぺここと頭を下げた

「なんで、こんなところに？」

「あ．．．つ、徹くん、もう帰っちゃいました？」

「うん、もしかして、待ってた？」

「はい．．．やっぱりなんか心につまってる感じがして．．．はつきりさせたいんですけど．．．」

「そっか、そういうもんか、」

「そういうものなんです、私、とてもじゃありませんけどずっと感とか信じてきましたから」

「ははっ、」

「徹くん．．．どうしちゃったんだろ、」

前はもつと明るかったっていう感じで、
なんか今になると重いもの背負ってそうで力になってあげたいんですけど」

「彼女の事とかもういいの？」

「はい、私はいいんです、徹くんが覚えてなかったって事はその程度だったって思い知らされましたから
だから、ちゃんと何を覚えてるか、何を忘れているか聞きたかったんです

それで、その、力になってあげて
徹くんが幸せでいてくれればそれでいいんです・・・」

「へえ・・・、麻衣ちゃんも凄い事考えてるんだね」

「そ、そうですか？私あまり・・・」

「ははっ、照れてる、」

「そ、そういうのやめてください・・・」

「ごめんごめん、山田はさ、なんで麻衣ちゃんに教えないんだろうね」

「・・・？」

「分かんない？」

「は・・・い」

「それで傷つくと思ってるからだよ」

「え？」

「そのこと話して、麻衣ちゃんが傷ついたら怖いから
本当は、山田も麻衣ちゃんの事ちゃんと好きだったんじゃない？」

「そんなことは……」

「私的には、麻衣ちゃんの中でもう答えはでてるんだと思うな
でも、そういうところ、山田とそっくりだから
どうなるか怖くていいだせないんでしょ？」

「私は……変りたいです……山田さんと新しくまたや
り直せたらなって……」

「変わりたいって思ってる時から変わってるもんでしょ、
そういうの、自己中って言うんだよ」

「……自己……中……」

麻衣ちゃんはぶはっ吹き出した

「そっか……そうだよ……あははっ」

「山田は誰よりも麻衣ちゃんと

川瀬と私の関係を壊したくないと思ってる

それで、今普通に告白したって振られるに決まってる

だから、真正面からちゃんと山田と向き合って

それで自分の思いどんつとぶつけたら

山田も分かってくれるっ！！

振られてもいい！

あたって砕けるだ！！！！！！」

「はははっ……分かりました、頑張りますっ」

「頑張れ」

「はい！」

そう、その笑顔、山田が大事にしたかったものは

その笑顔だったんじゃないかって思った

山田は不器用だからなあ、

賭け

・・・ついノリであんなことを・・・

「あたって砕けるなんて・・・何様だよ私、」

「今更後悔か？」

「はっ、川瀬？なんでここに・・・」

「待ってたんだよ、徹がささーと帰っちゃうから一人で帰るのもあれだし

・・・その・・・」

「盗み聞きしてたってわけか」

「わ、悪く言うとそういうことになるな、偶然な、偶然」

川瀬は顔を赤くした、何が恥ずかしかったのか正直分かんないけど

「徹、告白断ると思う？」

「うーん・・・断ったとしても、すごいカッコいいことっておわりそう」

「ああ、徹だもんな」

「でしょ？でも、」

「でも？」

私はちよつと下を向いた

「でも、山田がもし、もつと先へ進みたいって言っんなら、私たちが応援しなきゃねって」

「もつと先って？」

「麻衣ちゃんと付き合うつて事！」

「あー、そっか、そうだな、山田に彼女かあー、考えられないなー」

「きつと、一ヶ月ぐらいで慣れちゃうと思うなー」

「あはは、ちよつと分かるかも」

「じゃ、賭ける？山田が断るか付き合つか」

「いいぞつ、俺は断る」

「じゃ、私は付き合つ、ね、決定！」

「勝つたら？」

「新しいプロマの本買ってもらっ」

「えー！あれ高いんだよーっ」

「がんば！」

「じゃあ、俺はクレープ5個おごってー！」

「食いもんかよ、いいけどそんなぐらいなら」

「おっしや」

「じゃ、帰るか？」

「おっっ、帰ろっぜ」

災難

ピンポン

「はい、どちらで……」

「徹くん……」

「何？何度も言っているだろ、もうお前とは縁を切ったんだ」

「でも、本当の事が知りたいの、私……っ

徹くんの事が……好き……です……」

「ごめ……なさい……」

ああ、僕はまた、麻衣を泣かせたのか……

「ごめんだけど、無理だよ、」

「徹くん、本当に変わってないや、やっぱり、西野さんが言ったこととはあってたな……」

「は……？何言っ……」

「徹くん、いつまでもうじうじすんなって、西野さんが言っただけだ」

何悩みこんでるのは知らないし、分からないけど、

私、それでいいと思ってる、人間、悩まないで生きられるなんて
贅沢だよ、でも、徹くんは逆でいっぱい辛い思いしてきたんだと
思う

だから、

だからたまには、周りの人を頼っていいんだよって

言ってた

だから、振られてもよかった、

これで、ちゃんと自分の気持ち、しっかりあきらめられたし

でも、私は・・・その、

彼女でもなんでもないけど、周りの、見守ってる人だって

・・・それだけは分かってほしいから、今、きました

もう一度言います

徹くん、私、貴方の事が好きです」

すごくしゃんとしていたのに

手は震えていて、涙をこぼすのを必死にこらえて

下唇をぎゅっと噛んだ

．．．．．そつか．．．．．

「．．．．．麻衣は、こんなに強くなったんだね」

「．．．．．記憶が．．．．．徹くん？」

「ごめんね．．．．．僕、本当に君の事恋愛感情で見たことなく

でも、傷つけたくなくて、いいよって言っちゃったんだ

ごめん．．．．．僕には、好きな人がいます．．．．．

すごく前向きで、ちゃんと相手の気持ちも分かってるんだ

でも、時々つらそうな顔をする彼女が放っておけなくて

．．．．．

「その人、西野さん．．．？」

「あははっ．．．．．分からなくていいよー」

「？」

「だから．．．．．僕が．．．．．うつ．．．．．」

「徹くん？」

ああ、こんな大事なときに……

「徹くんつつ！……！！！！！！」

私達にこんな災難がふりかかってくるとは

思っ………いた人が……

1人、いたんだって

奇妙

プルルルル

「・・・・・・・・はいもしもし・・・・・・・・」

私は受話器をとった

「・・・・・・・・っ」

その女の子は泣いていた、

「・・・・・・・・と・・・・・・・・るくんが・・・・・・・・っ

徹くんが・・・・・・・・っまた・・・・・・・・っ

「・・・・・・・・?!山田がなんかあったの?!」

「ごめ・・・・・・・・なさい・・・・・・・・私がいたのに・・・・・・・・体調に気がつかなくて・・・・・・・・」

「そんな事言ってる場合かつ!今の状況教えろ!」

「・・・今・・・手術室にいて・・・それで・・・

失敗したら・・・また、記憶が・・・」

「・・・そんな・・・病院は・・・病院はどここの病院なの？
！」

「えっと・・・×××病院・・・」

「分かったつ、今行く・・・！！！！！！」

私は病院へ走り出した

山田が、

「バンッ」

あんなに悩んで答えを見つけようと必死だった山田が

「山田？！山田はどこ？」

あんなにたくさんの思い出があるのに

「今・・・手術室です・・・」

こんな事ですべて忘れてしまうなんて

「僕なら……もう、大丈夫だよ……」

ずっと、思いたくなかった事が、あつてはいけないのにつ

「やま……だ……」

「一応どこしました、後は様子を見てください」

「は……はい……ありがとう………」
「………」

「よかったよ、山田が無事で」

「ははっ、ありがとう、」

「私からも……ごめんね、あんなときに倒れるなんて………」

「あんなとき？」

山田は確かにそう言った

私は何がなんだか分からなくて青ざめになっている麻衣ちゃんをじつと見ていた

「・・・・・・・・あの・・・・・・・・時よ・・・・・・・・？」

ほら、私が・・・・・・・・徹くんに告白した・・・・・・・・時・・・・・・・・」

「告・・・・・・・・白・・・・・・・・？僕は・・・・・・・・」

うつ・・・・・・・・」

「山田・・・・・・・・っ」

「大丈夫・・・・・・・・夫・・・・・・・・僕、やっぱり駄目だね・・・

覚えてなかった・・・・・・・・麻衣・・・・・・・・ごめん・・・・・・・・」

「い・・・・・・・・いいよ・・・・・・・・もうすんだ事だし・・・・・・・・」

そう言った麻衣ちゃんは凄く悲しそうに目を伏せていた

「麻衣・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

それから、3人は何もしゃべらず帰った

「んだよー俺だけ呼んでくれないなんてー」

「いつやー、麻衣ちゃんに川瀬のじゃなくて私の電話番号教えてよ
かったなー」

「このやろ・・・・・・・・」

「2人ともごめん・・・・・・・・」

「なんで？なんで山田が謝るのよ？」

「・・・・迷惑、かけたから・・・・・・・・」

「いいのよ、山田はいつも川瀬の面倒見てもらってるから

「こんぐらいすつとこどつこいだっ！ははっ」

「す、すつとこどつこいっておま……………」

それに、俺だけが悪いみたいに言うんじゃない」

「あはははっ」

あれ？そういえば、川瀬に話してないのに、山田が病院行った事知ってたなんて……………」

山田が教えたのかな？

なんか、最近、奇妙なことばかりだな……………」

両親

「やつまだー、課題みせてっ」

私は山田の席へ向かった

「やってないの？」

「もっちろんっ」

ピースして山田にへへっと笑った

「おっれもー」

間から川瀬が入ってきた

「川瀬は論外」

「はあああー？なんでーっ」

「私は最初はやってあるから、でも川瀬はやってないでしょ？」

「御尤もだな」

「山田ああああー」

川瀬が泣きながら山田にすりよった

「わらにもすがるようにするんじゃない、まったく、川瀬は子供だなあ」

「お前はおばちゃんじゃ!」

「はあっ? 私が? まだ16ですけど」

そう、こんな感じが居心地が良かった

今はなんとなく違ってきたような気がする

分かんないけど、山田の記憶喪失の事があって以来だ

「川瀬、土曜日、夏期講習休みだし、3人で遊ぶ?」

「おっ、いいね」

「川瀬ん家って入ったことないんだけどさ、いい?」

「おっっ、大丈夫だぜ」

「よかった、じゃあ、明日の1時から川瀬ん家行くわ」

「あっ、私も」

川瀬・・・なんで大丈夫って言ったんだろ

親がいないって事、山田は知らないんだっけ

8年前

「可哀想にねえ、まだ幼いのに親を亡くすなんて・・・」

「しつ、聞こえちゃう」

「あつ・・・」

川瀬は両親を事故で亡くして

今までずっと一人暮らしだった

お金の事は週に一度、親戚がきてくれてから心配することもない
たし

私たちが出会ったのは10年前、小学校の時からずっと一緒だ

昔はすごく泣き虫だった

すぐ転んで泣いて私の家でよく手当てをしてもらっていた

でも、両親が亡くなったときから泣かなくなった

転んでも涙をこらえて手当てをするのも拒んだ

「川瀬、課題、まーっだやってないのー？」

「むむむむ、なかなか終わらなくてさあー」

するとごり先生がやってきた

「おい川瀬、何やってんだ？」

「ご、ごり、．．．お絵かき中です．．．．．」

「なわけがないだろ、ほれ、見せてみ」

「わっ」

「．．．．．課題．．．．．やってないのか？」

「脳みそが宇宙人に取られました」

「それは理科のえいりあん先生か？」

「ハイ」

「ばかか、お前の脳みそなんぞ誰もいらんわ」

「ええっ．．．．．なんでそんなひどいこと．．．．．」

「あ、そもそも、お前に脳みそなんかあったのか？」

「あ、ありますよっ！！」

「あははー」

川瀬は、今、何を考えているんだろ・・・

「何やってんの？行くよ？」

「あ、待ってー」

3人の関係

カタカタとパソコンの音。

電気はついていない机、パソコン、椅子、ベットという密室。

栗金団さんが入室しました。

鈴木さん：あ、ちわー

栗金団：こんにちは

鈴木さん：例の件どうなりました？

栗金団：内容は理解できました。

鈴木さん：それで、如何するかが問題ですね

栗金団：知っていても形にしなければ意味はないですね

鈴木さん：おおー、いい事言いますね

栗金団：有難う御座います

鈴木さん：いえいえ、それで、関係者はあと他にいませんか？

栗金団：あー、はい

鈴木さん：分かったんですか？！誰ですか？

夢烏さんが入室しました。

夢烏：何の話ー？

鈴木さん：あー、こつちの話です

栗金団さん：後から教えますね

鈴木さん：ありがとうー

夢烏：？？？

栗金団さんが退室しました。

「…………山田 徹…………興味深いね…………」

「コンコンッ」

「誰？」

「私です」

「ああ、如何したんだい？」

「彼の事について調べましたが、8年前までのデータがありません。

何らかの故障によるものでしょうか……………」

「いや、故障ではないと思うよ……………」

そうか、山田徹は記憶を失くしている

いや、でも記憶を失くしたってデータには残るはずだ

…………ましてや珍しい病気にかかった者の名前を出さないはずがない

何か裏があるのか、それとも……………」

「…………先生？」

「君は川瀬 優騎の事を調べてくれ」

「誰ですか？」

「・・・・・・・・・・」

「分かりました。はぁーうちの先生は隠し事が多すぎます」

「そういう先生は嫌いかな？」

クイツと顔を近づける

「／／／／／．．．．つ。内密に．．．．行います．．．．」

「ああ、そうしてくれ」

君は少々可愛いんだが、僕の趣味ではない

好き好んで此処に来たのなら

前の奴等の様に逃げていくさ

・・・・・・・・山田徹は本当に記憶喪失なのか

・・・・・・・・川瀬優騎もまた、山田徹に狂わされた者・・・・・・・・

僕はパソコン室を離れ、地下にある研究室へ向かった

あそこはとても静かで落ち着く

それに・・・・・・・・

菖蒲の改造人間も、もう少しで出来る・・・・・・・・

「・・・・・・・・」

僕の愛しい人・・・・・・・・

待っていてね・・・・・・・・きっと僕が、君の望み・・・・・・・・全部叶えて
あげるから・・・・・・・・

真実を・・・・・・・・教えてあげなくちゃ・・・・・・・・ね
「」

川瀬の家

ピンポン

「お邪魔しまーす」

「お、山田、西野、来たか」

今日は土曜日で川瀬と遊ぶ約束をしていた

「入って、俺の部屋で何する？」

「うーん・・・優騎ん家って何あんの？」

「何も無い」

「えー・・・」

「雑談？」

「いいね、そうしょ」

「あ、俺、いい事思いついた」

「何？」

「トランプならあるからさ、7ならべで負けた奴が

告白か答えを述べるっていうの」

「？何それ」

「告白は自分の事とか昔あったこととかいって

答えてっていうのは誰かが質問したものに答えるっていうの」

「おー、面白そうだね」

「やってみる？」

「7ならべ得意じゃないなー」

「まーぢ？」

「じゃ、運試しでばぬき」

「まー、それならいいか」

「じゃあー決まりっ」

カードゲーム

3人は淡々とババ抜きを始めた

「むぎぎ、俺が勝つ！」

「要するに勝たなくてもいいけど負けたら駄目って事でしょ？」

川瀬は相変わらず暑苦しいし

山田は清々しい事を言ってくる

「2人共、オーラが怖いから」

「だって勝たなきゃ山田に何聞かれるか……」

「さー？」

「ほら、次、川瀬の番だよっ」

「お、おう……」

すると川瀬は私のカードと取ってすごく驚いた顔をしていた

「川瀬にジョーカーが行ったのか」

「な、何故分かった」

「そりゃ顔見たら分かるって」

「顔にやすいもんね笑」

「ぷーんだ」

次に山田が川瀬のカードを取るもの、一向にジョーカーは山田の手
に渡らなくて

川瀬がずっとジョーカーとダイヤの2であろうカードを持っていた

「川瀬分かりすぎ」

「これじゃ川瀬の負けになりそうだ」

「むむむ」

川瀬はカードをシャッフルしていた

「どれ、取ってみる不器用婦人」

「はっ、簡単さ、むつつりすけべ」

山田は右の方のカードを引こうとした

と、川瀬がにやけていたのを見て山田は左を取った

「カーーーーーーッッ」

川瀬は叫んだ

「簡単だって言ったじゃん、くそびつち」

「う、五月蠅い……なんで俺が……なんで俺なんだ……」

どうやら山田はジョーカーでないカードを取ったらしい

それで川瀬の負け。

「じゃ、川瀬、告白か答え、どっちにする？」

「むむむ、告白でいい……」

「そ、ガンバ」

「くっそーーーーー」

「で？なんのはなしするの？」

「俺の趣味」

「却下」

「えーーーーーなんださ」

「そーゆつのやめとこつよ、なんかもつとすげー話」

「んー俺の亡くなった親の話とか？」

「親？優騎の親って亡くなってるのか？」

「うん・・・」

「そうか、じゃ、その話な」

家族

川瀬は淡々と何かを口走るように親の事故の事を話し始めた

「・・・俺のせいなんだ」

「？」

うつすらと何かを語っているように放った言葉

「俺が、家族を壊したんだ・・・」

「壊した？」

「うん、そんな俺、まだ8歳で親が何かでもめてるの知らなくて
皆仲良くって思って俺が何かいいものないか探そうと思って

外まで行って帰ってきたら親がいなかったんだ」

「何・・・それ」

「親は、俺を探しに出かけて、それで……それで……っ」

川瀬は今にも泣きそうに下を向いた

「もういい……言わなくていいから」

私は言った。……山田は？

山田は何か考え込んでいる様に頭を抱えた

「……山田？」

「……」

「山田っ」

「え……あ、ああ……うん……」

「如何したの？」

「う、ううんっ……なんも無い」

「そ、じゃあババ抜き再開する？」

「うん」

家族 山田ver

川瀬が親の事を話していた

「俺を探しに出かけて・・・・・・・・それで・・・・・・・・それで・・・・・・・・」

『ソレデ?』

「もういい言わなくていいから」

西野は川瀬の肩に手を置いた

ちよつと憎らしかったが今はそういう場合ではなかった

それで？それで・・・？親が事故死？

ふと衝撃に打たれたように何かの会話が頭の中から離れなくなった

「X1031は未だに理解不能の生物だ」

「はっ・・・生物？本当に生きてるんでしょうかねえあんな物体」

男2人だった。X1031・・・どこかで聞いたような名前

1人はすごく真面目そうな顔つ面で、2人目はどこか馬鹿にしているような言草だった

「ブラッディ・・・如何しますか？」

すると奥から足音のようなものが聞こえた

ブラッディ？僕は・・・？

「まだ……まだ殺しては駄目な様だね……」

何か不審な点が必ず殺す前に訪れると思うからね

例えば、僕が死んじゃう……とか……^^」

ブラッディらしき人物はにつこりと笑みを浮かべてその場を去って行った

何故、何故今この状況で僕の知らない事が頭に入ってきたのだろう

記憶を失っているせいなのだろうか……

でも、記憶を失ったのは8年前、僕はまだ8歳だぞ……

あんな現場に居る訳が無い

「山田……っ」

「え……あ、ああ……うん」

とにかくこのことはあまり話さない方がいいかな

‘ 皆の為だよ……その事話したら皆変に思っちゃうかもしれないからね…… ’

そっか……そうだよ、変に思っちゃうから言わなくていいよね

僕は頭の中の誰かに救いをもらった

山田の様子

翌日

「ふあああ〜〜」

「何？川瀬、ちゃんと寝た？」

「山田御母さんだ笑」

「ふああ〜俺は夜の10時に寝る派だから」

「小学生かつ」

「お肌が大事なもの」

川瀬はそう言って顔に手をすりすりと触った

「この美形が崩れたら全国の俺様ファンが悲しむ」

「お前のファンなんか誰もいやしないさ」

私はそう言った

「えー、いるよ俺、一応モテるもん」

「うつそ、がちで？」

「へっへーん」

「・・・・・・・・・・」

山田？・・・・・・・・最近、山田の様子が益々可笑しい

「・・・・・・・・・・」

何を考えてるのか・・・・・・・・

「山田・・・・・・・・？」

山田を覗き込んだ

山田はびくつっとなつて赤面になった

「な、・・・何？」

「いや、喋らないからなんでかなーと」

「なんでもないよ」

「・・・・・・・・・・？そう・・・・・・・・・・」

三人の関係 2

パソコンの音。

鈴木さん：あの事件、本当に事故だったんですね

栗金団：さあ・・・

夢烏：それって川瀬さんの事ですか？

鈴木さん：なんで君が知ってるの？

夢烏：あ、いえ、勘で言っただけだよー

鈴木さん：そー、ならいいけどー

栗金団：そういえば夢烏さんって誰なんですか？

鈴木さん：あー、思う、だってこのサイト開けるのって限りあるよね

夢烏：いえ、普通に開けましたよー？

栗金団：普通に何か開けませんよ、専用のパスワードを持っていないと

警察でも開けませんよ？

夢烏：私、一応そちら側の人間なもので

栗金団：人間？果たしてそうですかね？

夢烏：ひどいですよー、私だって人間なんですからー

人間ね……

夢烏さんは俺には敬語で鈴木さんには普通

何らかの関係があるか

それよりこちら側の人間がすぐ近くにいたなんて

あまり信じたくない事だな

川瀬優騎の事も知っていた奴の事だから知り合いか

それとも山田徹との関係者か

‘川瀬さん’夢烏さんはそう言った

あの事件の有力な手がかりを掴んでいる事は確かだな

夢鳥さんは菖蒲と同じ改造人間だったりして……

そんなわけないか

そうだとしたら私と並ぶ天才が作ったとしか言いようが無い

「失礼しますよ？先生」

「ああ……如何した？」

「川瀬優騎について調べましたが、彼もまた8年前のデータが入っていません」

「だと思ったよ、西野菖蒲の件は？」

「彼女はデータが一つもなく、調べられません」

「だろうね、」

だって彼女は人間じゃないんだから

もし、その天才が山田徹と川瀬優騎の8年前のデータを消したのなら

その中に知られたくない過去があるからだということか

「先生、最近隠し事が多いですよ……」

「いいじゃないか」

「はいはい」

身体測定

「山田ーっ」

「ん？」

「俺っ俺っ、背ー伸びたよっ2 c m！」

今日は身体計測だった

「僕は2・3 c m伸びた」

「むっ、それは身体計が壊れてたんだ！」

「無茶言っなよ」

「川瀬ーっ、山田ーっ、どうだった？」

「お、西野、僕は2・5 んで、川瀬は2 c m、」

「ぷぷっ、かわ……川瀬……負けて……ま……けてんじやん」

「何が面白いんじゃない」

「どんまい」

「西野はどうだったの？」

「変わらない・・・」

「ふ・・・っ」

「川瀬、笑ったな？」

昔っから川瀬と私の身長は凹凸だ

山田は川瀬より高く、私は川瀬より低い

「ふっふっ・・・」

「まだ笑ってるのか！」

「いーじゃ・・・」

「山田君・・・」

そこにはTシャツにショートパンツという普通の清純そうな女の子が
がたっていた

・・・ん？この子・・・

「麻衣」

「・・・・・・・・あつ・・・・麻衣ちゃん」

「・・・・・・・・何しに来た？」

「私、引越すの・・・・ここを離れる前に山田君に会いたくなっちゃった」

えへへと笑って言った

「いつ？」

「明日・・・・・・・・」

「・・・・・・・・んだよ・・・・それ・・・・」

山田が言葉を吐き捨てるように言った

「ごめ・・・・・・・・」

ごめんなさい、と、言おうとしたときに山田が怒鳴りつけた

「如何してそんな大事なことを黙ってたんだよ！！！！！」

麻衣ちゃんはぼろぼろ泣き出した

「私・・・・・・・・っ・・・・・・・・いえなくて・・・・・・・・ごめんな・・・・・・・・さ・・・・・・・・い・・・・・・・・」

山田も少し反省したようだ

「・・・・・・・・分かった、明日の何時？」

「・・・・・・・・夕方タ方の4時じくらい・・・・・・・・」

「そっか、」

3秒さんぐらいの沈黙しんもくがあつた

「・・・・・・・・・・」

「私わたし、帰かえるね・・・・・・・・・・」
「めんね急に言いっちゃって、ばいばいっ」

「あ・・・・・・・・じゃあね・・・・・・・・」

馬鹿 麻衣ver

タタタタッ

私は走りながら帰った

・・・

「きゃっ」

誰かとぶつかった

「・・・おっとー、ごめんね？ケガ・・・ない？」

綺麗な顔立ちの男の人だった

「あ・・・いえ、」

「・・・へえ、よくできてるね」

すると私の顔をするりと触ってきた

「な・・・なんですか！」

「ふうん・・・誰に改造してもらったの？この顔」

「…………チツ…………あんた誰？」

こんな事を知っている奴なんて…………

「…………怖い怖い、本当はこんな性格だったんだ

ごめんね、僕はただの一般人さ、ちょっと頭が天才なだけだよ」

「…………知ってる、こういう奴はナルシストって言うんだろ」

「本当だよ？」

「そ、で？用件は？」

「お前のご主人様は何を企んでいるの？」

「私には麻衣って言う名前がある」

「あーそつか、ごめんね、でも、偽名でしょ？」

「…………そこまで…………分かった、でもあんたは勘違いしてるよ」

「僕が？」

「ああ、私は人間から改造されたんじゃない、元々ロボットだったんだよ」

「…………ロボット…………へえ、それはそれは、

僕より技術は発達していないご主人様ってところかな？」

「お前……っ、あの人はお前よりも天才だよ、

今は……っ今は……」

「記憶を失くした……とか？」

「……んでそれを！」

「君もあの人も隙だらけだね、馬鹿で嬉しいよ

御蔭でこっちには有力な手がかりを掴んだからね」

「なんのだよ」

「さあ？」

「てめっ……」

「おっと、暴力はいけないよ？……夢烏って知ってる？」

「……夢烏……」

「惚けても無駄だよ？お前だろ？」

「……は……っやっぱあんたは馬鹿だよ」

「……？」

「夢鳥は違つよ、夢鳥は私じゃない、ただ、これだけは言っておく

あの人が記憶を取り戻したら、

一番困るのはあんたじゃない、西野菖蒲、

．．．．．ああ、そつか、あれは偽名だったね」

「．．．．．っ」

「クスクス．．．あんたも何も分かつちやいないよ

可哀想な子、誰もあんたになーにも与えなかったんだろ」

「．．．．．うるさい．．．．．」

「おっと、残念、もう私は行くから、

最大の敵は身内の中にいるって言つしね？」

「．．．．．？」

「あ、そうだ、」

彼女は足をピタツととめた

「これ以上関わらない方があんたには傷つかなくていいんじゃない？．．．クスクス」

彼女は去って行った

僕が何を知らないというんだ……

彼女が何を知っているというんだ……

如何して、菖蒲の事は誰にも話してないはず……

‘最大の敵は身内の中にいる’

あの言葉が気になる

敵……？

そもそも僕に味方なんかいたっけなあ

彼女はロボット……だから有り余る程データはある

川瀬優騎の事を話しにださなかった

山田徹の事、菖蒲の事は話に出した

川瀬優騎の事はあちら側も知らないというのか……？

菖蒲……誰にも僕の邪魔はさせない

君が望むのなら、僕はこの手を危めても構わない

告白

「川瀬君、大事な話があるんだけど・・・」

可愛らしい女の子が川瀬を呼んだ

「?・・・うん」

「放課後、グラウンド前の校舎で待ってるから来てね」

「うん」

・・・川瀬はモテるらしい

山田もそうだった

私の周りはいつもこういう奴だなあと改めて思う

「何?川瀬元気ないじゃん」

「え・・・っそう?」

「うん、らしくない」

「うつそだー」

「いつもだったらうかれてほら、俺はモテるんだぞって言うんだけど」

「・・・そうだったかな？」

「そうだったよ」

私は何故かむきになっていた

最近川瀬の事ばかり考える

「いや・・・うん、なんかさ、こつやって告白する子ー達が可哀想だなんて」

「なんで？」

「・・・分かんない」

川瀬はちよつと考えてから言った

告白2 川瀬ver

放課後、俺はグランドの校舎まで来た

彼女はもういた

待っているようだ

「…………遅れてごめんね、俺、ちょっと課題たまっていたからさー」

「う、ううんっ……全然いいよ、私なんかさっき来たばかりだったし」

「そっか、それならよかった、…………それで、話って何？」

聞かなくても内容は分かっていた

「…………川瀬君、好きな人とかいる？」

ほら、ここからだ

「…………いないけど」

「よかった……私、川瀬君の事好きだから」

「・・・・・・」

「あつ、いきなり言われても困るよね、ごめんね」

「ううん、大丈夫だけど、なんで俺なの、もっと他にいい人いるだろ」

なんて嘘だけど

「か・・・川瀬君がいいのっ・・・」

「如何して？」

「川瀬君すごく馬鹿っぽいけど、そこもいいとこだし、すごい広い心とかもってそうだから・・・」

変わらない、皆答えは一緒だ

でも・・・これ以上他人に傷つけたくない・・・

俺は、僕、に逆らった

「バチツバチツ」

「？何の音だろ」

「工事かなにかだと思うから大丈夫だと思うよ」

「そっか、それで、さっきの事だけど、君が俺を好きでも俺は君を好きじゃないから」

愛せないんだ……でもさ、俺みたいな奴より、もっと大切にしてくれる人とか

いるんじゃないの？」

「……………」

「頑張りなよ」

俺は彼女の髪をくしゃつとなでた

「……変わっちゃったな……」

「？」

「私はいいの、振られる覚悟でいったから、最初からわかってたけど
これでよかったと思ってるの

私、川瀬君にちよつとでも考えてほしかった

・
・
他人とかじゃなくて、ちゃんとした人としてみてほしかったから・

だから、これで十分だよ

何も、傷ついて無いから安心してよ」

「……………」

彼女はすぐに去っていき、暗闇の中へと消えた

俺は人を愛することができない

でも、それでいいと思っている

この先、周りが誰であろうと

何も周りに居なくても

俺は・・・僕は・・・人じゃなくなっているんだから

「バチツバチバチツ」

頭の中の景色、

それは俺にとってひどく醜いものだった

すべてはデータが送り込まれ、僕の頭の中でぐるぐるまわってどこかへ消えてしまうのに

ずっとその思い出だけが残ってしまふ残酷なもの

俺は愛せない

愛したとして何になる？

愛せなかったとして何になる？

愛はただの人間の欲望だ

人間も俺も醜かった

ただ、それだけの事

先生

「川瀬、どーだったのー？」

「ふったよ、だって、知らない人だし」

「そうだね」

・・・川瀬は、何か隠している

それが、如何してか、私が関わっているような気がする

「・・・川瀬優騎、8年前、親を亡くした・・・と？」

「・・・誰・・・」

知らない人だった

学者だろうか

研究者っぽい感じの不思議な人

でも・・・知ってるような気がする

「僕？僕は・・・先生だよ、6組の」

「はっ・・・担任は今、結婚してどっかいったからごりがやっ
てんじゃないの？」

山田は言った

「おや、変な噂たてられたものだね、僕は黒田 郁、1 - 6の担任
です」

「担任・・・が、如何して俺を？」

「いや、噂だけど・・・当たった？」

「・・・気味悪い」

「はははっ、そんなに怪しいかな？僕、川瀬君はいい人だと思って
いたけど

こんな人なんて、がっかりだなあ」

不思議だ、彼の放つ言葉は一言一言、なにか、重りがつまっている
ようで

こちらまですごく侮辱されているようにかつとなってくる

「・・・っ、俺はあんたなんか知らない」

「おや？何も僕はそんな事言っていないけど？どうしたのかな？」

「だまれ・・・っ、俺はお前が嫌いだ・・・っ」

「初対面なのに・・・嫌われちゃった、如何したらいいかな？ 菖蒲ちゃん」

「え・・・」

いきなり流された、・・・如何しよう

・・・と、とりあえず・・・

「川瀬、そんな力リ力リしちゃ駄目だよ」

「・・・でもっ」

「後で聞くからそんなに怒らないで」

「・・・分かった」

「ははっ、菖蒲ちゃんは説得力あるね」

「そ、そうですか・・・？」

「うん」

「むかつ（）西野、行くぞ」

「え・・・？ うん・・・」

ぐいっと私の手を引っ張った

「・・・僕も忘れないでよ」

山田が後ろから言った

でも私は川瀬と教室まで戻っていった

「・・・忘れられてるんじゃないかな？」

「・・・ははは、そうかもしれませんね」

「山田君は・・・記憶無いんだっけ？」

「・・・はい・・・」

「へえ、菖蒲ちゃんのまわりは凄い人がいっぱいいるね、
如何してだと思う？」

「偶然じゃないですか？」

「そうかなあ、僕は運命だと思うんだよねえ」

この世に神がいるのなら

如何してこんな世界つくたんだろうね・・・」

「・・・？」

忠告

「神様の気まぐれだとしたらさ、そんなしょうもないところにいるんだろうね

地球なんか神様が暇つぶしにつくった一部だとしたら

不公平だよ、この世もあの子達も」

「あの子達……」

「山田君は大人っぽいけど、なんでも分かっているような感じだけど
あんまり知らないよね」

「……何が言いたいんですか」

「……つまりはさ、人間、見た目で決まるものじゃないよーって事」

「は、はあ……」

「菖蒲ちゃんは、どんな子なの？」

「んー……おかんみたいなですよ」

「あははっ、これはこれは、」

「一緒に泣いて笑って、叱る時はちゃんと叱ってくれて」

「へえ、それってただ、あわせてるだけだったりするかもね」

「？」

「でも、それが人間には羨ましい姿だから、……言ってること
分かんない？」

「……少し」

「だよね、気にしないで、僕は会議があるから教室に戻っていなさ
い」

「は、はい」

「あと、川瀬優騎君には気をつけるんだよ？」

「は？」

「僕からの忠告、ばいばい」

僕は職員室へ向かった

如何して僕は彼にあの事を話したのだろう

少し、ほんの少しだけど・・・彼ならなにかを変えてくれる気がした

？ 川瀬ver

僕は人を愛さない

誰も愛したくない

もう愛しないと決めたから

「……………優騎……………っ」

「ドンッ」

キッキー

車が人をはねた音

僕の目の前で倒れた一人の女性

「……………ごめんな……………さい……………」

はっ

「またこの夢か・・・如何してこんな知らない夢ばかり見るんだ」

「優騎ーーーー、どうかしたのー？すごいなされてたけどー？」

「叔母さん・・・う、ううん、なんでもないよ」

「そう、なら良かったわ、私、出かけるから留守番お願いするね」

「うん」

「ガチャンッ」

扉の閉まる音

「う・・・ぐ・・・つまた・・・まただ・・・」

「X1031それがこれからのお前の名だ」

「X1031・・・？」

「そう、お前はこれから人間じゃない者として生きるんだ」

「人間・・・じゃ・・・ない？・・・どういうこと・・・」

・

え……でも……俺はたしか……………」

「つまりだな……………」

「はいはいはい、彼も混乱してるでしょ？やめといてあげて」

「ブ、ブラッディ様……………」

「ブラッディ？誰だ」

様をつけるぐらいなら偉い人なんだろうな

「……………」

「い、いえ」

いい人っぽく見えるけど……………」

「……………」

「びくっ……………」

「あれ？あたってた？」

「こくり……………」

「あははっ、いいね、君、採用、日本名で言つと……………」

今……なんて言っただろう

かすれて何も聞こえなかった

「……それで、この人達はブラッディって読んでる」

「如何して」

「さあ？」

ブラッディは暗い笑みを浮かばせた

「びくっ」

「あはっ、面白い面白い、反応がいいね君、きっとあっちでも好かれるよ

僕も行きたいなあ」

「あっち？」

「あっち……あ、そっか、えっと、んー、簡単に言うと人間界、だね」

「え……ここは……」

「宇宙だよ、ほら、ちょうど見えたあれが地球だよ」

ブラッディは指を指した

「・・・・・・・・地球・・・・・・・・」

「あれが・・・・・・・・君のいた世界・・・・・・・・」

羨ましそうに地球を眺めていた

「・・・・・・・・俺は、如何して此処に？」

「改造されたんだね、きつと、誰がやったんだろうね、こんなに・
・

・・・・・・・・おつと、いけないいけない」

「なんですか」

「秘密」

「はぁ・・・・・・・・」

「君は死んだ、それを僕達が回収しただけさ」

「死ん・・・・・・・・だ・・・・・・・・？」

「そ、現実はそのなんにも残酷だったなんて、・・・・・・・・ね

漫画みたいにはいかないのに・・・・・・・・

意味もなく一つの命を使おうとする・・・

馬鹿みたい

ただのアホにしか思えないよ」

「如何してそう思うの？」

「思わないかな？」

もしさ、もし、君が取り残されたら怖いじゃない？

それだよ、自分は死んでもいい、だから、君だけは助けたい

バツカじゃないのって、思わない？

後に残された人の気も知らないで

一人また一人、淡々と死んでくんだ・・・

何が君のためだよ、

ばっかみてえ」

ブラッディの声が荒々しくなった

「だから僕は君を回収した、これから僕達の仲間だ

安心していいんだ・・・」

「はっ・・・はっ・・・なんだよ・・・これ・・・」

? 山田ver

「……………でい……………」

「……………」

「ブラッディ！」

「うわっつー！」

「いつまで寝てるんですか？早くしないと遅れますよ」

「は……………どこへいくの」

「あっちへいくんでしょう？自分が言ってたんじゃないんですか？」

「あ、ああ……………そうだった……………彼は？」

「あちらの方で準備していますよ」

「そう……」

「空港で待ってますからね！」

「うん」

彼女は誰だろう、一瞬そう思った

「ブラッディ……行くのか？」

「x1031……もう準備したのか？」

「ああ、……起きるの遅いぞ……」

「ごめんなさい」

「おう、」

「女って……馬鹿な生き物……」

「そうか？」

「ちまちましてて、占いとか奇跡とか信じてさ

漫画みたいになんかいないつつのに……

僕はもっとビジネスとかで大儲けしたいのになあ

おまけのマグカップとかそういうちまちましたところもいいんだけど

いろんなものくっついてそうで怖いんだよね」

「うーん……それってさ……」

ブラッディがロマンチストなだけなんじゃない？」

一瞬目を細めた

「……はははっ……そうかな……」

そうだった、お前には兄弟とかいたの？」

「妹がいるよ、何があっても命がけで助けたい、そう思える妹が」

「……ふうん……兄弟とは……兄弟とはそういうものなのかなあ？」

「あ、そっか、ブラッディはこういうの馬鹿みたいって思うよね

でもさ、人間、皆臆病なんだよ……」

何か守りたいものとか守ってくれるものとか

気持ちだけで思っただけじゃない

もっと褒めて、もっと愛でて、それで……形に、残しておきたいんじゃないかな……」

「へえ……やっぱお前すごいよ」

「何が？」

「人見る才能ありありだからさ」

「ありありって・・・まあ、・・・よく言われてたなあ」

「誰に？」

「西野に」

「西野？」

「あ・・・うん、そっか、

俺の幼馴染、怒って泣いて笑って、自由な奴さ」

「そうなんだ、そういうのうざいとか思わないの？」

「あはは、西野は特別な存在だから」

「特・・・別・・・？」

「そ、初めて俺の中に入ってきた人間

昔、いじめられてた俺に

いつもなぐさめてくれて

お前は人を見るのがうまい、だからそれをいかせて

怒ってた

すごい前向きでいいなって思えた人間だから」

「ふうん、じゃあ、僕もその中にいれてよ」

「？」

「リセットするんだ」

「え？」

「僕はこの世の盲点、天にこの世を託された身でもあるんだよ」

「え、そんなすごいのか」

「でもね、一番すごいのは天の息子

女神に愛された息子、僕はそいつを知っている

憎いけど嫌いじゃない

いい奴だから

でも、僕には愛しきれなかった

その息子の憎さを踏み潰したくなった

僕が……僕が彼を……殺した……」

「誰だ、その息子は」

「……それは……いえない……でも、

それを天は許した

天は息子など必要なかったからだ

ずっと自分の力で這い上がってきたのに

ここで生まれてから地位が高い奴なんかに

ましてや息子なんかに

自分の居場所をとられなくなかったから」

「父親が……息子を見捨てる？」

「そう、そういうものだね

天も昔は、人間だったからね

よく似てるよ

……でも……女神は許さなかった

僕のすべてを否定した

僕から何もかも奪おうとした

でも奪えなかった

そこに、彼が、・・・生き返った彼がいたから

女神はこう言った

彼は一人じゃ生きられない可哀想な子

うさぎさんみたいなものだわ

大事にしなさい

大事に大事に育てて

彼が18になったら

私の元へ返しなさい

でも僕はいいえと答えた」

「如何して」

「憎い人間を心の底から大事になんてできません

だから、形だけにしてあげたいんです

彼は心のこもったものなんか望まない

すべて結果だけを求めるでしょう

だから形だけでもいいですかっ

言っただ

すんなりいいよって言うてくれたけどね

「そっか」

「女神は形の無いものは求めない

だから形に拘った僕の意見は

女神は引き受けた

女神は天とは違う人だった

はじめから地位を持って生まれた

天はそれを憎んだ

ただ、女神は自分は殺されるんだって思っ

て天を愛し、愛され、殺されないようにしたんだ

それがこの結果さ

「天も女神も、欲が有るって事か」

「うん・・・あ、急ぐ、空港に遅れるよ」

「はあっ．．．．はあっ．．．．僕が．．．．殺した．．

．．．．僕が．．．．僕がブラッディだったのか．．．．？」

山田はははと笑った

「．．．．まさか．．．．」

？ 西野ver

「菖蒲、．．．．これが．．．．天に逆らった罪そのもの．．
」

「ぼこっぼこっ」

「大丈夫だよ、それは水だけど、息ができるように酸素をいれてお
いてあるからね」

「．．．．わた．．．こぼっ．．．

私は．．．．ここは．．．．どこ．．．．」

「君は菖蒲、ここは研究室、

君は天に逆らったという大罪を犯し、今、僕がひきとつたんだよ

君の罪．．．それは君の存在そのもの

僕は天が敵だとみなす様な者を放って置くわけにはいかないからね

菖蒲は僕、僕は菖蒲、一人では見えなかったものが二人になると見える

それが僕の犯した罪

意味、分からないよね」

「う、うん」

「……僕には人を超える力を持っている

天に仕えし者としての役目

仕えし者は4人いてね

ハート、スペード、ダイヤ、クローバー

それぞれの者はある特徴を持っている

ハートは人に愛され、スペードは人を強くした

ダイヤは人に金を分けて、クローバーは人を癒した

そして天はその管理をしていた

昔は……昔はすべてがうまくいった

5人が支えあいできた地球はどことなく他の星に恨まれた

その中でも天が愛したのは一番最悪な月の神、ルナだった

ルナは酷い女だった月の女神であろうものが

人を殺すなどというのは大罪

でも天はそいつを愛した

だからルナは死刑にはならずにすんだという

天は地球の平和よりもあいつをえらんだ

人間を殺したあいつを

だから僕は許せなかった

僕は言った

人間を殺したあの女を地球の天の嫁にするなどあっていい事ですかと

天は怒ってこう言った

彼女はそんな悪い者ではない

彼女が人間を殺してはいないのだ

といった

でも僕は思えなかった

人間を確かに殺していました

ルナは悪名の高い神です

そんな人と結婚なんて！

天はあの女を踏み台に使えばいいじゃないですか

って言ったんだ

天はもうカンカンで怒った

僕は天に逆らうという罪を犯して

地位が下げられた

でも天は重要なことを忘れていた

僕の力を

僕はスピード

人間強化や改造人間を作り出す力を持っている

この手でもう一度復讐してやるのさ

天に、ルナを愛した罰としてな」

「……………」

じゃあ・・・私・・・は？」

「あ、ああ・・・君はハートさ

人を愛したり、愛されたり、人の気持ちを操る事ができる

ただ、君は如何してあんな事をしたんだい？」

「あんな・・・事・・・？」

「・・・う・・・っ今・・・の・・・は・・・？っ」

? 西野ver

「菖蒲、．．．やつと、真実が見えてきたよ．．．

そう、菖蒲は天を殺したんだ．．．．」

「わた．．．わたし．．．が．．．？」

てん．．．．を．．．ころした．．．？」

「菖蒲、君は悪くないよ何も悪いことなどしていないのだから

僕のところへおいで．．．．菖蒲は僕、僕は菖蒲

二人はそう．．．．二重人格．．．」

「は．．．っはははは．．．．っ

馬鹿だ．．．．こんな事．．．．ありえない．．．」

? ? v e r

「怖い、怖い怖い

哀れなことだ

醜いことだ

人に愛されなかった妻の子、おいで・・・おいでえ・・・

私が癒してあげる・・・私が慰めてあげる

だから・・・はやく・・・さあ・・・おいでよ・・・
・・・」

赤い爪

赤いマニキュアの爪

肌が白い

白い、白い、白い手、

白い、白い、白い、白い、
‘クロイ、’

黒い、黒い、黒い、黒い

僕に近づく

僕に迫る

走る、走る、走る

誰かとぶつかる

「・・・・・・・・・・菖蒲・・・・・・・・・・」

‘アヤメ、’

手をつなぐ

彼女の手は冷たい、冷たい

彼女の顔は怖い、怖い

彼女の背中は赤い、赤い

如何して・・・？

「妾の子・・・・・・・・おいでえ・・・・・・・・」

僕は走る

まだまだ走る

菖蒲をつれて

どこまでも

白い世界の

僕等だけが取り残された世界

眠ったままの

取り残されたままの

ただの世界

天の見捨てた世界

どこかで

あるいはここで

何かが回っている

回っている

揺れる、揺れる

白の世界が揺れている

僕等が揺れている

走っても走っても

何も変わらない

何も動かない

如何して？

如何して？

僕等はそれでも走る

一人になりたくなくて

走る

どこまでも

過去も未来も無い世界で

ずっと走り続けていた

何も変わらない世界

誰もが知っていた真実

それでも走る

何かを見つけたくて

何かを探したくて

何かを形にしたくて

僕等は知っていた

何も起こらないことを

天もが知っている

僕等を見て

ただ、何も感じず

何も喋らず

何も思いもせず

見つめる

見つめる

怖い、怖い

「菖蒲・・・・・・・・菖蒲・・・・・・・・はやく・・・・・・・・走らなくちゃ・・・・・・・・」

「走る・・・・・・・・？如何して？」

「あの・・・・・・・・あの女が・・・・・・・・つくる・・・・・・・・」

「あの女？・・・・・・・・でも・・・・・・・・走ってないのは・・・・・・・・君でしょ？」

「何言つて・・・・・・・・」

「君は何が怖いの、何が嫌いな、何から逃げてるの？」

君は走ってなんかない・・・・・・・・逃げてるんでしょ・・・・・・・・？」

逃げてる

僕は逃げてる

菖蒲は走る

僕は如何して逃げる

何から逃げてる

あの女から？

天から？

見たくない現実から？

違う

僕は僕を受け入れるのが怖い

自分が怖い

生きてるのが怖い

死ぬのも怖い

僕は・・・

菖蒲は如何すればいいの・・・？

菖蒲、

僕が守りたいもの

ずっと、ずっと、

本当は

白い世界

誰も知らなかった

天も知らなかった

僕等だけが知っている世界

僕等がつくった何も無い世界

変わるのが怖いから

何も変わらないものを探していた

変わらず

白い世界に君と僕で居た世界

でも、

もう、塗りつぶされてしまった世界

赤、青、黄色、紫、黒

僕等の居場所は

もう何処にも無い

「菖蒲．．．泣かないで．．．僕が助けてあげる

また．．．作り直そう？

僕等は永遠を手に入れた

．．．．時間．．．まだまだ．．．あるんだから」

ピピピピピピ

カチッ

「思い出したか．．．ずっと忘れていたことだったのに．．．

ああ．．．こんなに歪んでる．．．

白い世界

僕等の世界を．．．取り戻す．．．

そのためには．．．

菖蒲の周りがジャマだな．．．」

帝

栗金団：この前の件、川瀬優騎について何か分かりました？

鈴木さん：その件で少し不思議な点が一つあんの

栗金団：？

鈴木さん：帝って知ってっすか？

栗金団：はい、2000年前の事ですよね、如何して貴方が知って
いるんですか？

鈴木さん：うーん……

栗金団：ねえ、如何してですか？帝は2000年前の四天王と天し
か知らなかったはずですよ

鈴木さん：まあまあ、むきになるのは止めましょう？

栗金団：すみません

鈴木さん：うん、まあ、俺も最近知ったんだけどさ、帝って今も生
きてるらしいっすよ

栗金団：どこからの情報ですか？

鈴木さん：いえいえ、これは内密ですので、いえないっすね

「帝が・・・・・・・・生きてる？・・・・・・・・・・はっ、まさか」

帝は確かにあの時・・・・

「帝殿、お客様がいらっしゃいます」

「・・・・・・・・・・おう、通せ」

「・・・・・・・・・・あれ？すんなり入れた」

「我はそんなに偉方ではないからな」

「でも結構有名だよ？」

「名だけの四天王など我はいらぬ」

「帝・・・・一応言つとくが僕も四天王なんだが・・・・侮辱しやがったな」

「はははっ、お前は好き放題遊べるであろう」

我は外へ出れないのだ

ダイヤが農民に金を分け与える、ただ、それだけの事なのに

外へ出られないのじゃったら元も子もないだろう

金は・・・すべて天へまわっている

・・・許せない・・・それを天は何にっこうとるか分かるか
？」

僕は首を横に振った

「・・・遊びじゃ、月の女神と酔い痴れず遊んでおる

お前はそないに苦しゅうない、自由があるのだから

我にも欲しかった、・・・この世にただ一つだけ眠るといわれて
いる

永遠の力

永遠に生き続けられる力

我は奪われた

天によって

お前は永遠の力がある

我に有った筈の力

これで改めて分かったよ

「……………もう……………必要とされていないのだと……………」

「……………っ帝……………」

「何だ？慰めはいらぬぞ」

「びくっ）」

帝……………？帝……………どうして……………如何してそんなに赤いの？

「天が決めたことは絶対、

我はそれに従うつもりだった

できれば……………あんな顔……………こんな事になる前に潰してしまいたかったよ……………」

よく聞け……………四天王は四天王ではないとこれからも生き続けることができない

我は……………また戻ってくる……………」

そして……………四天王が四天王で有り続けた時

……………天は滅びるのだと……………」

言い伝えた……

我はそれを信じる

天は滅びる……

そう……滅びる……」

帝はそう最後に言い残して命を引き取った

そう……確かに死んだ……

……？

帝は……また戻ってくると言った

何故？

死んだ人間が生き返れるというのか？

……『できるじゃないか』

僕になら……できるじゃないか

僕が生き返らせた？

嘘だろ？

如何して？

帝は死んだ

それで？

ソレデ

帝はどうなっ
たんだ？

毒林檎

「……菖蒲ちゃん」

かすかに聞こえた薄っすらとした声、

後ろから聞こえたこの声は

「黒田先生？」

黒田郁先生、新しく来た私達の担任だ。

「いやだなあ、僕は上の苗字で呼ばれるのが一番嫌いなんだよ

郁先生でいいよ」

「じゃあ、郁先生」

「よし、良い子だ。あ、そうだそうだ、川瀬君も山田君も君と仲いいの？」

すごく愛くるしそうな声で尋ねてきた。

「川瀬は幼馴染で、山田は……うーん……」

川瀬の友達で、私が最近知ったのか……そうだったなあ」

「へえっ、最近？」

「うん、6月ぐらいだから……丁度1ヶ月ぐらい前かなあ……」

初めはね、私、この人と上手くやっていけるかなあって思ったんだよ

すんごく静かそうで、川瀬とは正反対の感じ、

でも実際喋ってみるとすごいなの、

口下手じゃないし、喋り方も相手引き込むような感じで

聞く立場になったらちゃんと聞いて同じ気持ちになったみたいで

すごく安心する喋り方だったなあって思った

近くで見ていると周りを引き付けるオーラがあって

通りすぎる女子は振り返るし

こんな奴この学校にいたんだなあって思ったよ」

「……ふうん、山田君の事好きなの？」

「？好きですよ？川瀬も、皆このまま一緒にいたらいいと思います」

郁先生はちよつと悲しそうな目線を向けた

「……このまま……？それはちよつと無理なんじゃないかなあ」

「うーん……分かんないじゃないですか、私的には2人がいない人生でおわるなんて

人生損してると思いますよ、郁先生だってそういう時ないですか？

変わらないままでいたらなつて」

「思ったことはあるけどね、僕はそれが叶わなかった人間だから

……おっと、川瀬君と山田君とは少し間をとった方がいいかもね」

「如何して……？」

郁先生はクスッと笑った

何か考え直した様だ

「……菖蒲ちゃんは林檎好き？」

「え、はい」

「そうだね、皆林檎好きだよね

僕も好きだよ」

「は、はい……そうですか」

「皆好きだから、美味しいから安心してきって食べてるでしょ？

でもそれってね、大間違えなの、林檎にだって毒が入ってるかもしれないし

入ってないかもしれない

今、君が手にしてる林檎は本当に安心できる林檎かな？」

安心できる……人

「食べてからじゃもう遅いんだよ

食べちゃったらもうそこでゲームっておわっちゃうでしょ？

そんな人生つまんない、

それならさもつと良い方法考え付かない？」

「良い……方法？」

「毒殺」

郁先生のこぼした音が何故か廊下に響いた

「え？え、え？」

「あはっ、冗談冗談」

「なんですかああっ」

冗談には聞こえなかった言葉

響いた音は今も廊下を回っている

ゆれている

誰かへと伝わり

また誰かへ伝わる

そうしてその現場にいなかったものまでもが知っている事がある

それを時に人は以心伝心と勘違いする

哀れなこと

醜い、醜い

来る、迫ってくる

赤い爪

白い手

黒い黒い

誰かと一緒に逃げる

誰と？

何処で？

何のために？

「・・・め・・・ん・・・ちゃ・・・菖蒲ちゃん！！！」

「はっ・・・え、はい」

「如何したの？ぼーっとして」

「す、すみません・・・」

「いいよ、あ、毒林檎は食べることも利用する事もできるんだよ」

「へ？」

「あはっ、予鈴なるから行くね」

「は、はあ・・・」

夢 川瀬

ピーピーピー

「優騎君．．．お母さんとお父さんは．．．」

「．．．．守れなかった、．．．．そう、あんたは守ることさえ
できなかった

．．．．し．．．．人殺し．．．．っ

あんたさえいなければあんたの親は．．．．っ
」

「やめなさいっ！！！！！」

僕の横で叫ぶ女

止めている女

泣いている女

皆僕を汚いもので見る

同じだ、

同じだ

皆同じ

「・・・・・・・・人殺し？」

「そうよ！！！！あんたがあの時外になんかいないければ・・・・・・・・っ
っ」

「十分だよ、僕の何が悪い？人殺し？殺してなんかいないさ
分かってた

見てたんだ親が死ぬ瞬間

「・・・・・・・・え・・・・・・・・」

「最高だね、僕は人なんか殺しちゃいけないだもん
見てただけ、ああ、死ぬんだなって」

女は青ざめた

「・・・・・・・・んで・・・・・・・・っなんで助けなかったの・・・・・・・・っ

一言・・・・・・・・あんたがなんか言っつてやればよかったのに・・・・・・・・
っ」

「嫌だね、過去には戻ることはできない

過去の事をぐちぐち言っただってなにも変わらないさ

僕はこれでいいと思ってる

家族なんて元々いらなかった」

「あんだねえっつっ！！！！！！」

「不倫……」

女はびくつとした

「不倫相手、お父さんの、不倫、なんでしたの？」

お母さんの不倫……あの人でしょ？」

僕は指をさす

「……っ俺は……」

「……違うとでも？……汚れてる

こんな奴等がこの世に吐いて捨てるほどあるなんて

不公平だね

不倫してるのに家族なんていえるのかなあっ？」

皆が見てる

僕を見てる

汚れてる

汚い

気持ち悪い

人間なんか嫌だ

嫌い

「・・・・・・・・ふっ・・・・・・・・あはっ・・・・・・・・あははっ」

「何で・・・・・・・・笑って・・・・・・・・」

「馬鹿にも程があるよねえ、それでも大人と子供で区別されるなんてさ

馬鹿だね

頭悪いのは子供なんかじゃない

人・・・生き物・・・全部悪いからいけないんだよ・・・つつ

あはははははっ」

「いい加減にしなさい・・・・・・・・!!!!!!」

「如何して？僕はあつてるでしょ？

何でさあ？

大人はうちの息子はっとか

子供はとか

何時も上で僕等がやってること全部見て

本当は何も分かっちゃいないのに分かったつもりでいて

そんな時に言うんだ

奴等が汚い声で言う

僕の事分かってくれない奴が自分の事は分かってくれているんだ

何も知らないのはそっちだ、何も分かってくれないのはそっちだ

何が大人だ

僕を縛り付けて何が楽しいんだ

あんた等は僕の事知らないくせに惨めな目でこっちを見る

汚そうにこっちを見る

汚い、汚い汚い！！！！！！

お母さんも・・・

お父さんも親戚もあんたも此処にいる奴等全員よってたかって僕の事馬鹿にしゃがって!!!!!!!!!!!!!!

・・・・・・・・っ・・・・・・・・くそ・・・・・・・・

馬鹿にするなっっっ

「・・・・・・・・ゆうきくん・・・・・・・・ごめんね・・・・・・・・私達何も分かってなくて・・・・・・・・」

「・・・・・・・・っ」

やっぱり

「・・・・・・・・ごめんなさい・・・・・・・・私も何も知らなかったのにいろいろ叫んじゃって」

やっぱりだ

「・・・・・・・・まだ思春期の子だったんですね・・・・・・・・」

「・・・・・・・・そうね・・・・・・・・」

なんで・・・・・・・・なんでこうなる・・・・・・・・

「あんたらが・・・・・・・・あんたらがいなければ・・・・・・・・っ僕だつて・・・・・・・・っ」

「
・
・
・
・
・
ふあああつ、
懐かしい夢見たなあ
・
・
・
・
」

大昔の話

「……最近……何故かあの時の夢を見る

……如何してだと思っ？」

「……さあ……私は見ませんが……」

「あの時……あの場所で確かに菖蒲は……いや、

そんなはずはない、……でも何故今更こんな夢……

……はっ……またあの時のようになるというのか

菖蒲はまた……再生されるのか……っ

……一体……如何すれば……」

「何ですか？先生独り言でも？」

「……うーん今回は特別に教えるよ」

・・・天、それは誰も頭のあがない存在

四天王、天の認める唯一の綱

四人の四天王は平和に暮らし、

人々もまた平和だった

菖蒲もその一人

四天王のハート

僕はスピード

帝はダイヤ

山田徹はクローバー

僕達は支えあいながらも生涯を大切に過ごして行くつもりだった・・・

だが、天は許さなかった

四天王はこれからも生き続けるのだと

天は不死の力を特別に四天王にあたえ

天も天の子もその力を手に入れた

僕も・・・菖蒲も・・・山田徹も・・・

帝だけが必要とされなかった

天は馬鹿だった

昔は金が沢山あったから

帝の存在は意味がなくなった

天は帝に不死をあたえなかった

帝は死んだ

元々体が弱かったからだ

だが、帝がいなくなると政治がうまくいかなかった

天は引き下がり、ルナに政治をまかせた

ルナはすごい権力と地位を握り

農民を従えた

するとみるみるとうまくいき

よくなったのだ

「・・・へえ・・・じゃあよかったんじゃないですか・・・」

「いや、これからなんだ」

ルナが権力を握ると

農民は沢山働かされ

それで疲れ果て死んでしまう人もいた

農民達が不満を持ち始めた頃

僕も菖蒲も不満を持った

農民が苦しんでいるのにも関わらず

天は遊んで暮らしていたからだ

天を殺そうという計画をたてた

だが、失敗におわった

天の力は農民が思っているよりもはるかに強く、

一瞬で死んでしまったのだ

僕も菖蒲も殺そうとした

僕も菖蒲も天にはとてもかなわなかった

僕はもう死ぬんだと思った

菖蒲は言った

私たちは不死

天がそうした

だからこれからも生きる

あんたがいなくなつて政治はできる

誰だつてできる

あんたさえいなければいいの

ここに死んでる奴等全員が死んでも

あんたが死んでも

私は生き延びる

あんたを殺すまで私は絶対に死んだりなんかしない

私たちを四天王にしたこと・・・後悔するわ！

強かった

菖蒲は強くて

天と同じように強かった

すごく黒いオーラがあつて

天はそれに圧倒され

打ち破り

殺した

・・・だが、天も不死だ

死ななかった

でも心臓を打ち抜いた

ものすごい悲鳴とともに・・・

天はその苦しみを味わいながら

ずっと一人間の屋敷に取り残され、悲鳴をあげ続けているそうだ

「・・・・・・・・天は・・・・・・・・まだ生きていますか・・・・・・・・」

「まあ・・・・・・・・ね・・・・・・・・もういないけど・・・・・・・・」

「何か言いました？」

「いや、何でも」

理科の先生

「あーーーーーっ!!!!!!!!!!!!!!」

職員室を通りかかった時声をもらした

「え、えいりあん先生」

えいりあん先生は理科の先生で神秘的なオーラがでている男の先生だ
一週間程前に学校から姿をけしたのだが・・・

「そのあだ名はいつまで続くんだ？」

「永遠ですよ」

えいりあん先生ははっと薄ら笑いをした

低い低音が誰もいない廊下に響く

「永遠って信じる？」

「不老不死の人なんて聞いたことないですけどねえ」

「人間ってね、頑張ればけっこう200ぐらい生きられるっていう説もあるからね

・・・ただ、人間が100までって思っちゃうと脳がそう感じて100に死ねるように頭が動くんだ

変わった説だけど、人間の力って実はものすごく強大で危ないものだし

でも、それをうまくコントロールできるかっていうとごくまれにいるかいなか

・・・うん、まあ、そういうものだ、人間ってのは

「うーん・・・難しい」

「はははっ、まだ分からなくてもいいぞ」

えいりあん先生は私の髪をくしゃつとなでた

「また、餅でたとえてやろうか？」

「もういいですっ、お餅が可哀想ですよ」

「・・・そう、・・・ごくまれに・・・ごくまれにいるんだよね

不老不死の人間が、

それがどうしてなのかは分からないけど

運命か、ただの偶然か

どちらにせよ、この世の神が認めた人なんだろうね

認められない人なんかには絶対不死にはしないよ

でもさ、不老不死の人間がいたらこの世の発展問題にも関わってくるし

歴史もおおしく変わる

何より研究者たちの血がさわいでしょうがないよな」

「研究者って何してるのかあんまり分らないですよね」

「怖いよな、俺も一応昔は研究者の助手とかやってたんだぜ？」

「へえっ」

「偶然かな・・・その人は不老不死を探してたんだ

きつとこの世に不死の奴がいるんだって

俺もそういうのは信じてた

でもその人さ、人体の解体とか

けっこうえぐいことはじめちゃってさ

人の心臓とりのぞいて変な液たらし始めて

そしたらさ、そこからへんな目玉みたいなものがこっちをにらんできたから

怖いくなつて逃げ出したんだよね

警察呼んでさ、そんでそいつはつかまったんだけど

未だにあの心臓はみつかってないんだって

……噂によると心臓が生きて街中を歩いてるっていう噂」

「……こ、怖いのが嫌いです」

「ぷ……っはははははははっ」

「えっ?! え?!」

「冗談だよ、今の話全部嘘」

「ええっ」

「……でも、そういう人もいるかなって思っちゃったりしてる自分が一番怖いんだよねえ」

「たしかに」

天

えいりあん先生は、如何してそんな話をしたのだろう

「変わった先生、そう思ったり？」

うしろから声をかけられた

「黒田先生・・・」

「郁でいいって言ってるのに」

「郁先生は不死って信じますか？」

「勿論、さつきえいりあん先生が言ってたことですよ？」

「聞いてました？」

「聞こえてました」

「そうですか」

「うん、不死ってね、人間にとって本当にいい事なのかなって・・・」

思ったり？」

「まあ、人間って不死の体手にいたら如何するんでしょうね

ずっと生き続けて何が楽しいんでしょうか

出会いがあつて、別れがあつて、それを繰り返すだけだろうに

そして最後には自分、一人、この世に取り残されて死にたいのに死ねない

そんな日々を過ごすだけでしょう？」

「うん、大正解だと思うよ

菖蒲ちゃんって実はマヤの予言とか信じる方でしょ？」

「ちよつとだけですけど

神様とかもいるって思いますよ」

「神様ねえ……

でも、それが本当に僕等の思っている神様なのかな」

「？」

「神様がいるのなら何故争いの無い日々をつくってくれないのだろうか

何故不公平にするのだろうか

平和に暮らせばいいのだろうに」

私は何故かかっとなった

「人間なんて所詮、その程度だったでしょう」

こぼした言葉

彼がびくりとなった

「菖蒲・・・ちゃん？」

「神様が決して悪いわけじゃない

人間が不公平な人生を、争うことの人生を選んだのでしょうか？

人間さえいなければ・・・

あんな奴等さえいなければ帝は・・・っ」

「菖蒲ちゃんっ」

「・・・あっ・・・え・・・っ・・・ごめんなさい

私・・・何か言いました」

「・・・い、いや、なんでもないよ」

「そうですか」

まさか、菖蒲が帝を・・・？

いや、違うそんなことあるわけない

「ごめんなさい、用事思い出したので帰ります

さようなら」

「うん、ばいばい」

・・・菖蒲・・・

何に迷ってあのときの‘体’を拒んでいるんだろうか

「・・・西野さん、可哀想」

「・・・ああ、麻衣ちゃん笑」

「・・・きもいぞ、どうだ？夢烏が誰か分かったか？」

「本当に、お前じゃないんだな？」

「ああ、そうだ。ヒントをあたえてやろう、

夢烏はあちら側の人間だ

私やお前とは違う

何も求めることができずに息をひきとった

私の……大切な人」

「へえ、あんたの味方？」

「いや、違う」

「は？じゃあなんで？」

「夢烏はあんたの味方だったさ

……だから私はあんたが憎い

でも、死なせたりはしないよ

人を殺すなんて……もう、この手を危めるわけにはいかない」

「僕は、菖蒲のためなら僕のこの体ごと失ったって

汚れたっていい

その方が、お前も幸せだったろう？」

「……懐かしい事を思い出させるな

徹も菖蒲も、どちらも記憶を自ら消え去った身、

私たちはその頭の役割をしているだけさ」

「夢鳥……夢の……鳥……」

「今でいう、鳳凰だな」

お前の間近にいる存在」

「僕の……？」

……鳳凰か……おもしろい、暴いてやろつじやないの」

「はっ、できるかねえ」

「カツツカツツカツツ」

「誰だ？」

一瞬で空気が変わった

黒い

暗い

でも、懐かしい

「お主」

僕を指差した

若い女性だ

黒い浴衣黒いセンス髪の毛は黒いロング

大昔の話にでてきそ……

ん？

大昔？

「お主、言つたであらう

お主の居場所はここではない

いつだって逃げそびれていたあの日々だったろうに……」

指を指した爪が赤かった

昔、菖蒲と逃げたあの場所

白の世界

醜い、醜い、醜い

「守ると言つた者、愛せと言つた者、生きろと言つた者は

すべて、あんたには何も与えなかった

あんたは誰からも必要とされなかった

そう思つてならんのだろうか？

ならば危めてしまえ

ならば殺してしまえ

お主に必要だったのは一つの

たった一つの勇気と幸せだったろう？」

「はあっ……はあっ……天が……僕を選んだっ？」

「そうなの、

お主が選んだ道

お主の人生

お主で導いて

お主で生きるのじゃ」

ぽんつと天は胸に手をおいた

「ここに大事なもんがあっただろう？」

お主がそれを信じる限り

私はそれを信じようぞ」

「でも・・・僕はそんなに強くない・・・し・・・」

「ほほほっ、そうかの？」

「こくこくっ（）強くなる秘訣とかない？」

僕っ、天みたいに強くなりたい」

「なあに極意は一つ」

「己を信じよ」

「・・・ほほほっ、忘れてはおらぬか

えらいぞ、よくやったの、天羅」

「・・・懐かしい名前・・・」

「ほっ、私には昨日の事のようにも思えるの、

新、天さんや」

「あははっ、照れるな」

「おっと、長話をしてはいけぬ

おそうなると神主に怒られるでならんわ」

「あははっ、神主さんも元気でよかったよ」

「うむ、早く死んでほしいの」

「それでは改めて

久しぶり、元、天さん」

「久しぶりじゃの、新、天さんや」

天2

「・・・・・・・・天？」

「なんの話だ？」

彼女は不思議そうに答えた

「ふむ、こちら知らぬようじゃな

主・・・・・・・・誰じゃ？」

「麻衣ちゃん、・・・・・・・・ほら、クローバーのつれだよ」

「おおっ、随分見間違えたぞ・・・

あの時から何年たった？」

「・・・・・・・・1000年近く・・・・・・・・」

「ほほほ、そうじゃの、私はもうこんなに年をとったのか

この世の長老様みたいなものだな」

「麻衣ちゃん、天が滅びたあとに天になった命天だよ」

「……えっ……あ、ああ……そうか」

「その様子だとクローバーとはうまくいってないようじゃの」

「別に……」

「そうかの……ほほっ、天羅、クローバーと対立しているようじゃの」

「……クローバーは今、記憶喪失ですよ」

「はて、何故じゃ？」

「自ら、失ったのだと……聞いておりますが」

「そうか、では教えに行こう」

「えっ、ちよっちよっと待ちましょうよ！」

「いや、こうゆうのは速めにいかねば」

私の体ももつか分からぬ」

「………命天………まさか」

背中が鱗がぴしっとはずれた

「この鱗が尽きるとき、天はお主になるのや……」

どうじゃ？嬉しいじゃろ？

今にでもはがれそうじゃ」

僕は首をふった

あまりにも痛々しくて

否定してはいけないような気もした

「・・・だから、せめて、せめて最後にまた、あの日々に5人で戻りたいのじゃ」

「菖蒲も・・・僕も・・・山田徹も・・・みか・・・みかど・・・は？」

帝

「・・・はて、帝かの、

それが私にも分からぬのじゃ

あの時、私が先に天になつておれば・・・

帝は死なずにすんだのかもしれぬ

すまん、天羅」

「いいえ、もう過ぎた話です

でも昔、僕、その名前嫌いでしたよね

天羅って名前」

「ほっ、そうだったの、私も命天の名は嫌いじゃの

私の真の名前を覚えておるか？」

「たつたのみこ
龍樂弥呼」

「覚えておったか、偉いぞ

お主は……」

「ないよ、元々、僕に名なんてなかったじゃないか」

「嘘じゃの、凡」

僕ははっと彼女の顔を見上げた

「凡……凡だった……か……はははっ」

「お主は自分の名も忘れたのかの」

「……それだけ……ここに愛着していたという事なだけさ」

「……ただ……忘れるな

お主の居場所はここでは無い事を……」

「ああ、だから僕は菖蒲が愛しいのさ」

「………実はの、

菖蒲殿が殺……刺した天は……今、

お主の後にいる……」

後を振り返った

すると一人の男性がたっていた

胸に傷跡・・・

「・・・・・・・・本当に・・・・・・・・？」

「久しぶりだな、我がいなくなって歴史がかなり変わっている

クローバーとハートも行方が不明だ

そして帝がいなかったかどうかだ？

我がいない間に何があった？」

「・・・・・・・・ふざけるなよ・・・」

帝を殺したのはあんただったろ？！

何で・・・・・・・・つづけたふりしてんだよ・・・・・・」

「すまんが、我は帝を殺してなどいない」

「はあっ？」

「・・・・・・・・落ち着け、天羅、まずは話を聞こうかの

どついつことじゃ？」

「我にも分からん、我は帝にルナには気をつけろと注意したんだ

それから帝が姿を消した」

「……っ、あんたは……ルナを愛していたんじゃない……なかったのか……っ」

「ああ、この世を救うためにはルナが必要だった

金もそこをついて

帝が金を我にわたさなくなったせいで

ルナは怒ったんだ

帝は……金を作りだす以外に特殊な技をもっていたのを
前も知ってるだろ？」

「……人に……見せたい夢を見せる技」

「そう、だが、そのほかにもあったんだ

……それが、

幻覚を見せる技

……」

「幻覚を？・・・帝が？」

「そう、帝はルナと我が結婚してからというものずっと幻覚をみせてきたと

我は考えている

皆がその幻覚に惑わされ

我を悪いものとみなした

そうして皆、我を殺そうとし

我は、その正反対の幻覚を見せられた

皆が我を嫌い

我を、我だけをおいて逃げてゆく幻覚

そうして我は皆を殺してしまった

・・・それが、真実

帝は・・・まだ、いる

現実世界の・・・そう

すぐ近くに

我等の事を見ている

帝は誰かに化け

すぐ近くでみているんだ

気をつける」

母

「そんな・・・っ、だったら・・・帝がこの学校の誰かに化けてる
ってこと?!」

「・・・そうとしか考えられないな」

「・・・生徒か・・・あるいは先生か・・・」

どちらにせよ、菖蒲やクローバーと関わっている人間じゃの」

「・・・でも・・・なんで帝はそんなことを?」

「我にも分からないからここにいます」

帝も今、どこかで我等をみているさ」

「・・・そのとおり」

「……つみ……帝っ？」

頭には包帯

手は血が流れていた

髪の毛はのびたままの金髪

服装は着物だ

「……懐かしい名前……」

我はもう……いや、なんでもない」

「帝……っ、お前、なんであんなことしたんだよっっ」

「それは、秘密。……月が満月になり、欠けた時、お前の心は我へと抱く」

……そう、何故かそんな気がした

どうしてだろう、……命天」

「……っ貴様っ」

「ははっ……汚れた手でまた我を触るのか？」

あんたは……あんなだけは許さない

我には……もう、この世に生きる術を失った

もう、この手には入らない」

帝は血で赤く染まった手をぎゅっと握り締め

次に命天に指をさした

そして低い声で怒鳴る

「知っている、あんたのあのときの体だってここにはいないはずだ

知っているんだろ?!じゃあ、なんで探さない?!

じゃあ如何して我には体を与えたんだ

……ああ、そうか

あんたもハートと同じ、

臆病者だったんだね

あはっ……あははははっ」

「……ちょ、ちよつとまてよ

命天があの時の体をもっていないなら

誰がもっていて……

今の、ここにいる命天は……っ？」

「……ただの抜け殻

中身がはいっていない抜け殻さ」

「抜け殻……」

「天羅、そろそろ目を覚ましたらどうだ？

これが現実だ

これが今の帝なんだ

ハートも天羅もあんたも

皆、あの日々から逃げそびれた臆病者だったんだよ」

「……は？……命天は

あの時……いたの？」

「……っ」

「そっだよこいつはいたんだ

命天はあんたの・・・っ」

「黙れ!!!!!!」

「・・・もうこれ以上というのはやめんか・・・」

天羅「・・・よく耐えたな・・・」

「こんなに大きくなつての・・・」

私は天羅の母じゃ・・・

「・・・この顔に見覚えはないか・・・?」

赤い爪

赤いマニキュア

「凡、早く着替えんか」

「分かってるよ」

・ ・ ・

「お母さんっ お母さんっ」

「・・・凡・・・ぼ・・・ん・・・」

「お母さんっ！！！！行かないでっ

嫌だよ！僕を・・・」

僕を一人にしないでよおっ！！！！！！！！！！」

「お母・・・さん・・・」

「ああ、私は天に選ばれた身、

だからいきたくなくても

行かなければいけなかった

すまん・・・すまん・・・」

あの場所

「そんな……」

「悪かったの、天羅

……帝、お前もあの場所へ帰るのじゃ

これに関係していた者、すべて、あの世界に戻らなければ

彼等と、私たちとの歴史が大きく変わってしまうのじゃ

……急がねば、菖蒲も、山田も連れて……

ああ、麻衣ちゃんだっけ？

その子も連れて行かなくては」

……

川瀬は？

「……川瀬優騎は？」

「……………」

「いや、なんでもない」

彼は……あの場所にいなかったというのか？

もしかすると

川瀬はこの地球にうまれたというのか？

だったら、何故、あの場所に……

「我に命天、天羅、帝、それに菖蒲と山田徹と麻衣ちゃんだな」

「……………ああ」

「明日の午後、6時、丁度、あの場所への門は開くのじゃ

だが、チャンスは一度、

逃してしまうとまたいつ帰れるか分からないからの」

「……………菖蒲と山田はまだ、思い出せないんだよ？」

「……………しかたあるまい、我等は記憶を失ってもあちらの人間

何かなんでも連れて行くのじゃ」

すると、帝があはつと声をあげた

「クローバーはちゃんど約束守るかなあつ？」

あははっ、

続くように帝はさつきとは違う殺気の満ち溢れた冷めた目で僕等を見つめた

そして低い声でいう

「……そんな簡単に、人間は信じてはいけないよ」

帝はそういうとまたいつもの顔に戻った

「僕からの忠告。

……あ、そうそう、X1031も連れて行くといいよ

きつと、不思議な事がおきるからねえ」

すると黒い闇へ消えていった

これからが始まりだ

もう、あの時間は戻ってはくれない……

X 1 0 3 1

「X 1 0 3 1 . . . ?」

「一体 . . . 誰の . . . 」

ゆれている、ゆれている

皆が揺れている

僕達が揺れている

何も変わらない

何も戻ってはくれない

誰も変えようとなんかしちやいなかった

. . . . ‘壊してしまえ’

川瀬優騎の声がした

「壊してしまえ

殺してしまえ

もう、戻ることの無いのなら、壊せばいい」

懐かしい記憶

懐かしい場所

決して戻ってくることの無い季節

遠い

遠い

泣いている

誰が？

誰かが

何処で？

何処かで

如何して？

「さあ・・・知る必要も無い」

彼はそっと僕の額に手をつけた

暖かい

そのぬくもりに寒気を感じる

首から肩へ

ぞっとするような恐怖を覚えた

彼は立ち上がると僕の額からぬくもりが消えた

悲しそうな顔

悲しそうな目

寂しげな背中

包み込むことさえ、拒むような視線

悲しい、寂しい

その言葉が絶えず僕の頭をぐるぐるまわる

彼がそつと口を開いた

小さな口を、

「・・・・・・伝えてください

・・・・・・俺はもう・・・・・・死んだのだと・・・・・・」

「……川瀬……優騎……？」

「誰なんじゃ、その川瀬優騎とやらは」

「菖蒲と山田徹の友達……」

彼は確か……いや、確かではないけど

一度、死んでいるんじゃないのかな？」

「……っ、知ってる！それ！」

麻衣ちゃんが口をだした

「そついうの、あつた！1000年前に一度、

そう、一度、望まれて生まれてくることの無い人間が

生きてもらうがなくて、死のうとしたときに

神様が与えた苦しみ

地獄より過酷な苦しみ

不老不死、

彼にとっては毎日が生き地獄だった

そう、まれにいるんだよね

そういう人間が」

「・・・X1031・・・要するにX1031が川瀬優騎で

そいつはその不老不死とやらなのか？」

「そういうことになるね」

「でも変じゃない？」

川瀬優騎はここで生まれたのに

神にあっていた・・・って事？」

「そういえば」

「・・・いや、あいつは多分、山田に改造されたんだ」

「改造？」

そう、

そうだった

「山田だって、本能的に僕と同じ力が少し、つかえた

川瀬は最初は不死じゃなかった

だけど川瀬が死んで

山田が改造したんだと思う

・・・でも、おかしくないか？

山田は何故、川瀬だったのか

何故、川瀬じゃないと駄目だったのか」

「我は、X1031という言葉が気になる」

「1031・・・何かのパスワードか？」

「いや、10月31日・・・というのも考えられんか？」

「誕生日？・・・ハロウィン？」

「うーん」

「あつ、川瀬を改造した日とか？」

「それもそうか・・・じゃあXは？」

「・・・」

「難しいの・・・」

「明日……」

僕はなんとか口にだした

「明日何日っ？」

「明日……あつ……10月31日」

「やっぱり、僕の考えでいうと門が開く日がこの日だと思うな

明日、何かがおこる

帝はそれを知っていて

多分菖蒲は知らない

山田は……知ってると思う」

「……んでっ……山田は記憶喪失なんだぞっ」

「これは僕の予想だ

山田本人は聞いてみないと分からないけどね」

「……山田が……記憶喪失じゃないっていいたいの……？」

無重力者

「簡単に言えば・・・な」

「・・・っ、・・・」

麻衣ちゃんは少し考えた

「・・・そうか、・・・明日の午後、4時行けばいいのだろう

行くよ・・・」

げんなりしたような顔で去っていった

「何じゃ、あいつは」

「きつと」

僕が口を挟んだ

今の僕なら分かった

今、言わなければ、もう思わないかもしれないという恐怖を打ち消すために

「きっと、山田徹を本当に愛していたのだろう」

僕は去っていった麻衣ちゃんの方角を見ていた

天羅も、命天もその意思を感じ取ったように僕が見ている方向を見た

「分かる・・・だから我は人間が愛しい」

命天も天羅も自分の無重力の力である場所へ戻っていった

昔、僕にもそんな力があつたな、

もう、この環境に慣れて忘れちゃったけど

帝は、忘れていないのだろうか

菖蒲は・・・

あの場所 ver 命天

「・・・天羅、我は、あれでよかったのだろうか

まあ、所詮は人間だ

我も人間であれば彼女と、また彼女と愛せたのだろうか

明日か、真実はそこにあるのに

我は何故、こんなところにいるのだろうか」

突然、自分のしていることが哀れに思えた

「我は、悲しい怪物だ

何も変えることをできずに消えた哀れな怪物」

「・・・何も変わらなかったわけではない

あんただって、知っているであろうに」

「・・・こうでもしないと自分が犯した罪が重いものに感じてしま
うんだ」

「そうかの、・・・この景色、よく飽きないものだな」

「我はこの景色を見ていると寒気がする」

「如何して？」

「知らないさ」

二人の会話はそこでとぎれた

ルナ、月は如何かな

楽しんでる？

今頃になってまた泣き叫んで無いか心配だよ

僕の愛しい人

朝

次の日

「・・・・・・・・麻衣ちゃんっ？如何したの？」

「あの、実は3人に話があつて来たの・・・」

今日の4時、駅の裏の小さい行き止まりの道があるでしょう？

そこで・・・・・・・・待つてるから・・・・・・・・菖蒲ちゃんも徹くんも、川瀬くんも来て欲しいの

お願いっ！大事な事だから」

「・・・・・・・・あー・・・・・・・・俺、無理、今日部活だわ」

「・・・・・・・・僕も部活」

「私は行けるけど・・・・・・・・」

「だめっ！、3人が全員来て欲しいのっ、私・・・・・・・・待つてるからっ！」

すると麻衣ちゃんは去っていった

後ろから黒田先生が来た

「……………麻衣ちゃんの言うこと聞いてあげれば？」

「郁先生っ」

「部活なら僕から休みにしとくよ

一応副顧問だしね」

「あ、ありがとうございますっ」

「いいんだよ」

「……………でも、郁先生、なんでそんなこと……………」

「駅裏の小さい行き止まりの道……………」

山田がぼそりとつぶやいた

「山田？」

「……………いや、なんでもない」

無表情で言った、目もあわさないで……………」

「4時かあ……………難しい時間だな」

門が開くまで30分前

3時30分

「・・・来たか」

「あといないのは・・・菖蒲と山田と川瀬、」

「帝・・・帝はっ?」

「・・・そういえばきてない・・・」

「あいつなら来るだろう」

「・・・同感」

うしろからだだだという音がきこえて

皆そこへ目をやった

「・・・つ川瀬・・・早く走れよっ」

「待って、俺っ・・・運動神経悪いんだからさっ・・・はあっ」

菖蒲と川瀬だ

「・・・山田は？」

「まだ・・・来てないのか・・・？」

「え・・・私たちは山田がてつきり先に行ってると思って・・・」

「・・・それより・・・この人たちは？」

「落ち着いて聞いてね・・・」

「菖蒲と、川瀬と山田は不老不死なんじゃ

あちら側の人間で、こちら側の人間とは別格の存在、

だから、こちら側の歴史は変えてはいけない

そのためにも早くあの場所へもどらなければ」

「??？」

「・・・あの、言ってる事が分からないんですが・・・」

「あーっ、とにかくっ、4時になってここに門が現れるからそれをくぐればいいの

話はあとでっ」

「はっはい!」

「命天は説得力あるな」

「・・・ははっ、お前に言われてもうれしく無いな」

「ほほっ」

帝と山田の関係 山田ver

一体何のようだ？

麻衣・・・

「君が山田徹？」

「誰だっ？」

後ろの方から声がした

僕は振り返ると少年は僕を見つめた

「いや、クローバーと言った方が正しいかな

・・・僕？僕は帝」

「何のようだ？」

「いいものをみせてやる」

少年はにやりと笑った

すると今まで見ていた景色と違う景色になった

見覚えのある、懐かしい景色・・・

一方通行の狭い道路だ

車を通るより少し大き目ぐらいの

まわりには家

ただの・・・

「・・・・・・・・も・・・」

誰かの声がする

「勉強しても山田に追いつけないことぐらい、知ってる

私は私なりに頑張ってみたいんだ」

女の子の声・・・・・・・・少し弱めに響いた声

空から聞こえた

懐かしい思い出

この声は……

「楓……」

また、流れるように響いた

「如何しても、何をしてでも強くなりたかった

ブラッディに勝ちたくて

私の限界を超えたくて」

ブラッディ……僕の名前

どこことなく根拠がなく弱弱しい声……

今度は別の人の声のようだ

「限界なんてないんじゃない？

自分が思っている以上に強いかもしれないじゃん

……なんて、そんな格好いい言葉言ってみたいんだけど

悪いが私は楓じゃないからな」

この声は

「由菜……」

「強くなることに意味なんか無いなんて

絶対に今のあたしは思わない

だって、勝ちたいんだもん

皆だって負けたくないでしょ？」

「俺だって、ここに居る皆だって、誰もそんなこと思っちゃいねえよ」

「・・・・・・ははっ・・・・・・そうだったな」

「如何する？この勝負」

「さあっ？」

「ふふっ・・・・・・如何でしょうか・・・・・・？」

「・・・・・・でも

負ける気がしねえな」

・・・・・・

僕が・・・・・・知っている懐かしい・・・・・・声

「愛、裕也、和斗、舞妓・・・・・・」

帝が言った

「やはり覚えていたか

．．．．皆．．．．お前と一緒に戦った者、

忘れるな、我もその一人だったのだと．．．」

「はっ？」

「．．．．行くぞ、なにやら麻衣というやつに呼ばれているんだろ
う？」

「．．．．何でそれを．．．？」

「いいから、ほら」

「分かってるよ」

門が開くまで5分前

「おっ、来た来た」

山田も帝も来た

「言つとくけど僕が連れてきたんだから感謝してよね」

「はあ？お前になんか道案内されなくてもいけたつつうのに」

「山田・・・性格変わってるし」

「いつの間に仲良くなったんじゃ、お二人さん」

「はー？馬鹿言わないでくださいよ・・・って誰？」

「紹介は後だ・・・あと5分で門が開く」

「命天、天羅、麻衣ちゃん、川瀬、菖蒲、山田、帝

僕・・・これで完了か？」

「ああ・・・あとは・・・門が開くのを待つんだな」

「後5分か・・・」

「待ってください」

後ろから声がした

「あの・・・私も連れて行つてはくれませんか？」

「楓・・・」

「え、え、え、？知り合い？」

「まあな・・・」

「あの場所の住人か？」

「はい、呪文とか魔術とかなら結構仕えますよ」

「魔術師・・・か？」

「まあそのようなもので」

「いいだろう、しかし、我等の敵ではないんだな？」

「ええ、そもそも私、平和主義なので」

「ぶっ・・・はははっ」

「あと1分」

「楓っ」

楓の後ろから5人ぐらいの人が来た

「お前等……」

「由菜です。楓のお友達」

「私もっ、愛でーす」

「裕也つつもんだ、よろしく」

「和斗だ、あまり人が多いのは好きじゃないが……」

「同じく、……私は舞妓……」

「なん………なんで？」

「そんなの、決まってんじゃないっ？」

「あたしら山田のお友達だからね」

「俺あ暇だったからだけど」

「まあ、皆に流されて」

「同じく」

「それで………こいつ等も来るのか」

命天はげんなりしているようだ

「ひつどお、私たちもあの場所の住人ですよっ」

「お前の発言はいちいち頭にくる・・・喋るな」

「なんだとおっ」

「はいはい・・・そろそろ門が開くからおとなしくして」

「ぶー」

門がギギギギと音を立てて開くのを皆感じ取った

「さーて、地獄門のお出ましですよ」

楓

「お前が楓？」

「人に名を尋ねる時は自分の名前から先でしょう？」

「チツ……格好つけやがって」

相手はじりじりと近づいてくる

ここはとある行き止まりの道路

人並みの少ない道

こんなところを気に入る人がいるのでしょうか

「おい、何処見てんだよ」

ああ、五月蠅い

「おいつ、無視してんじゃ……」

「ほんつとに退屈しねえ」

「は…….?」

じりじり近づいてくる奴を一瞬で吹き飛ばした

相手は壁に背中を打ちいまにも泣き崩しそうだ

「…………い…………って」

「こんな行き止まりを好むから悪いのでしょうか?」

「…………お前みたいなのが悪いんだよ!!」

俺等みたいな気持ちもわかんねえだろうな

いつだってそんな汚い目で見やがって

俺が何をした!

…………何もっ…………

何もしてねえじゃないか」

ああ、いつもそうだ

「…………私が…………」

「ああ?」

「私が何をした?」

何もしてねえじゃねえか

いつだって

いつだって馬鹿にしてきたのはお前等じゃねえか!」

「な……何言ってるんだ……こいつ……馬鹿じゃねえかよ」

「覚悟してください、私、今ちよつと機嫌が悪いもので」

「は……?……う、うわあああ!」

「ガタガタガタッ」

「な、なんだ?なんか音しなかったか?」

「気のせいじゃない?」

「……そうかな」

「まったく、人の気も知らないで次々と……」

さて」

「う……ぐ……」

「あなたの知ってること全部吐いてもらいます」

私はにっこり笑った

「ひ……何言ってるんだ……俺あ……何もしらねえぞ」

「そうですか……では用済みということ……排除しますっ」

「ま……まてっ……分かった全部吐くから」

「最初からそうすればいいものを……」

「お前の探してるものってこのマークの奴等だろ？」

少年はポケットの中から小さなマークのついた布を取り出した

「これは……」

真ん中には変な模様の鍵

そしてまわりにはあの場所の門そっくりの模様

「これをどこでっ……」

「それは……」

「おやおや、喋ってはいけないと言ったのに……」

約束を破っちゃうなんて……駄目ですねェ」

後ろに少女がいた

いつのまにいたのだろう

ずっと見られていたような気がする

「ひいつ……命だけは……」

「まあ……ぎりぎり言わなかったことですし……」

今回は大目に見てあげましょう

「あ、ありが……」

「なあーんて言うとも思ってたア？」

「ま……待ってください……そんなっ」

「理由は後から聞く……」

まあ……そのときにはもう……この世にはいないっかア
(笑)「」

「バリバリバリッ!……!……!」

「うぐあああああああああ」

「しゅう……」

今……何が起こったんだ

「はぁっはぁっ……何なのでしょう

……今っ……のはっ……」

由菜

「おら、如何した？」

もう終わっちまうのかよ」

「いい加減・・・うざんだって」

「はははっ・・・如何したあ？このマークが欲しいんだろ？」

「別に欲しくはねーよ」

「じゃあなんで・・・」

「ただ・・・むかついただけさ・・・」

「うがああああああ」

「ぷしゅー」

「・・・はー、今度は誰だ」

「ぷへっ」

「カメレオン野郎か」

髪の色が緑の少年

「……おねーちゃん、いじわるはよくないよ

僕がこらしめてあげよつかあ？」

「遠慮しておく……」

「如何して？……ねえっ……おねーちゃん……？」

「たたかいごっこしよーよ」

「まったく……いいだろう……相手になってやるよ」

「えへっ」

裕也＋愛

「あつ、裕也、このサイト」

「おー、やっとみつかったかー」

「やっぱりいるよ、神って名前」

「喋り方が修羅に似てんだけど・・・なんか違うかなあ」

「そうかもね・・・」

「そりゃア、よいことでエ」

髪はロングの金髪

目は赤い

「修羅っ?!!」

「ひさしぶりだねエ、おやまア、そのサイトア僕じゃないよ」

「じゃあ・・・誰が?」

「神を名のつた・・・ただの人間だねエ」

「うーん・・・」

「僕のサイトはパスワードが必要なんだア」

「パスワード？」

「そ、僕の恋人の名前」

「こ、ここここ、恋人？」

「失敬だなア、僕にだって恋ぐらいするさア」

「以外だ」

「まア、パスワードをみつけたことでサイトがわからなきゃ意味がないからねエ」

「そつかあ・・・いい加減教えてよお」

「秘密だもーん、」

「ケチーーーーー」

「ほほほ、さいなら」

修羅はそのまま消えていった

「今の見たか？修羅、胸にあのマークがついてた」

「え、・・・修羅もあの仲間？」

「そうとしか他に言いようはない」

「修羅も大変なんだね」

「そうだな」

和斗＋舞妓

「このサイト・・・」

「・・・やっぱり・・・」

舞妓は奇妙なサイトを見つけ出した

「和斗・・・このサイトの人って誰だと思います?」

「さあ・・・?」

舞妓はまたサイトの題名のしたをゆっくり見た

「生き別れの国」

そこは、あなたにとってあなたの居場所でしょうか

あなたがあなたでいられる・・・

あなたがあなたでなければいけない世界か

人はみな別れがあり出会いがある

ではそれがなかったら・・・？

‘すれ違い’

そんな人々だっているのでしょうか

でもそれが真実なのではないのでしょうか

たまたま時間が一緒でたまたま同じ時間、同じ空間にいただけ

偶然、・・・そう

ただのすれ違いをこの世の人々は繰り返しているだけなのではないだろうか

でも、みなはそれを運命というのなら

私はそうだと言い続けるに違いありません

だって、私もこの世の‘すれ違い’でしかないのですから

「すれ違い・・・ですか・・・」

「私と・・・和斗もそうなのでしょうか」

「そうだろうね・・・僕達はただ、重ね合わせた時間の一部でしかない」

ただの時間の欠片でしかない」

「人間とは、・・・愚かですね・・・」

「ああ・・・だけど、僕達はちよつと違う

異なる時間、異なる空間にいた存在

だけど、出会ってしまったと言っても過言ではないよ」

「どういふみでしょうか？」

「出会うはずの無い8人が出会ってしまったってことさ

それぞれの道があり、それぞれの空間にいた僕達を一つにしたのが徹

決して神は許さなかっただろうに」

「・・・修羅・・・」

「しっ・・・その名前をだしてはいけない

・・・どこで聞いているかは分からないから

こんな道中の五月蠅い場所で喋っているんだろう？」

「そ．．．．．そうですね．．．」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0572w/>

真実の果実

2011年11月17日21時29分発行